

ISSN 0386-5304

No.17 Mar. 1997

Bulletin of
The Hiroshima Botanical Garden

Published by

The Hiroshima Botanical Garden
(Municipal)
Kurashige, Saiki-ku, Hiroshima
Japan

CONTENTS

Osaki, K., Kondo, K. and Hashimoto, K. : Micropropagation of the endangered <i>Viola stoloniflora</i> by the multiple-shoot method.	1-8
Enomoto, K. : A Local Name of Plants and Ethnobotany in Hiroshima Prefecture....	9-43

目 次

尾崎健司・近藤勝彦・橋本清美：絶滅危惧種オリヅルスミレの組織培養多芽体による 大量増殖に関する研究.....	1-8
榎本勝彦：広島県の植物方言と民族.....	9-43

絶滅危惧種オリヅルスミレの組織培養多芽体による大量増殖に関する研究*

尾崎健司¹⁾・近藤勝彦²⁾・橋本清美¹⁾

Micropropagation of the endangered *Viola stoloniflora* by the multiple-shoot method*

Kenji Osaki¹⁾, Katsuhiko Kondo²⁾ and Kiyoshi Hashimoto¹⁾

はじめに

オリヅルスミレは1982年に沖縄県北部の辺野喜川中流の溪流沿いで発見され、1988年に新種として記載された種である (Yokota *et al.* 1988)。発見された自生地は1984年にダムの建設により水没したため、本種は絶滅したものと思われてきた (1989年3月24日付中国新聞)。しかし、1994年になって別の自生地が発見され、絶滅は免れていたことが発表された (1994年12月9日付中国新聞夕刊)。しかし、生育場所、個体群ともに僅少であるため、依然本種が絶滅に類しており、保護、増殖を必要とする植物種であることに変わりはない。1982年の発見時に採集された株は、一時2個体にまで減少していたが、広島市植物公園で鉢植えて増殖に成功し、個体は沖縄に戻し導入した (世羅1989)。

オリヅルスミレの増殖方法としては、有性繁殖と、無性・栄養繁殖としての株分け、葉挿し、根伏せ、茎挿しが試みられた。しかし、種子の発芽率が低く、また株分け、根伏せ、茎挿しの増殖率も低かったことから、比較的効率的な増殖法は葉挿し法とされてきた (世羅1990)。

植物の栄養系大量増殖の手段として組織培養法が有効とされている (Murashige and Skoog 1962)。スミレ属植物の例では、シロバナスミレ (*Viola*

patinii DC.) を用いたカルスからの増殖及び再生法が報告されているが、系統保存及び大量増殖には至っていない (Sato *et al.* 1995)。

オリヅルスミレは、極めて絶滅に近い状態の種である上に、1994年に再発見された個体は、遺伝的に異なっている可能性のあることが指摘されている (横田未発表)。そこで本種を大量に増殖し、且つ系統保存を可能とする遺伝的に安定な組織培養系が望まれる。本研究はこのような培養系を確立することを目的として行った。

材料および方法

供試材料には、1986年に横田昌嗣博士より栽培依頼されたオリヅルスミレ (*Viola stoloniflora* Yokota *et Higa*) を実生、株分け、葉挿しによって増殖し、栽培管理してきた成株の閉鎖花 (自家受粉) からできた種子を用いた。無菌播種を行い、そこから生じた苗を用いて器官培養を行った。予備実験で、葉、花柄、根からの外植体を用いた器官培養も試みたが、地面を這うように生育するためか、雑菌汚染の問題が解決できなかった。

1) 無菌播種培地及び播種時期の検討

種子は採種後乾燥密閉した容器に入れて冷蔵庫で保管し、2週間以内の実験に使用した。播種する前

* Contribution from The Hiroshima Botanical Garden No. 59

1) : The Hiroshima Botanical Garden

2) : Laboratory of Plant Chromosome and Gene Stock, Faculty of Science, Hiroshima University

Bulletin of the Hiroshima Botanical Garden, No. 17: 1-8, 1997

表1. 無菌発芽したオリヅルスミレの NAA, kinetin 添加1/2MS 培地における初代培養60日後

NAA (mg/ℓ)	kinetin (mg/ℓ)		0		0.02		0.2		2.0	
0	R	1	R	1	R	3	P	2		
	D	5	D	5	D	3	D	4		
0.01	R	1	D	6	R	2	P	3		
	D	5			D	4	D	3		
0.1	P	1	P	1	R	2	P	3		
	D	5	D	5	D	4	D	3		
1.0	P+C	2	P+C	2	P	2	P+C	2		
	C	2	C	1	C	2	D	4		
	D	2	D	3	D	2				
5.0	C	2	C	3	P	1	P+C	2		
	D	4	D	3	C+R	2	C	3		
					D	3	D	1		
10.0	C	2	C	3	C+R	3	P+C	3		
	D	4	D	3	D	3	D	3		

各区とも供試数6で培養開始後60日目のP:小植物体, C:カルス, R:根, D:枯死の個体数を示す。

に種子を1%塩化ベンザルコニウム液で5分間、有効塩素1%の次亜塩素酸ナトリウム溶液で5分間、70%エタノールに数秒間の順に浸漬して殺菌した後、滅菌水で3回洗浄した。

Murashige and Skoog (MS) 基本培地 (Murashige and Skoog 1962) に寒天 8 g/ℓ, ショ糖 15 g/ℓ 添加, pH 5.8 に調整し, 無機塩類濃度を 1/2, 1/4, 1/8 に調整したものを, 100 ml の三角フラスコに 50 ml ずつ分注し, 1 フラスコ当たり 10 粒を播種した。播種は, 1994年5月26日, 6月14日, 7月5日, 7月12日に行った。培養条件は, 22±2℃, 白色蛍光灯下 3000 lux, 24時間照明とした。

2) 無菌発芽苗からの不定芽誘導条件の検討

1) で発芽した苗はその後の生育が悪く, ほとんどの個体が褐変しはじめた。そこで, 発芽苗から直接不定芽を誘導するための条件の検討を行った。培地は 1/2MS 基本培地に寒天 8 g/ℓ, ショ糖 30 g/ℓ 添加, pH 5.8 に調整し, 生長調節物質としてナ

フタレン酢酸 (NAA) を 0~10.0 mg/ℓ, kinetin を 0~2.0 mg/ℓ の範囲で添加し, 試験管 (200 mm × 30 mm) に 20 ml ずつ分注した。1 試験管当たり 1 本, 1 試験区当たり 6 本を移植した。培養条件は, 22±2℃, 白色蛍光灯下 3000 lux, 24時間照明とした。

3) 葉, 莖頂, 根からの多芽体誘導条件の検討

2) の結果, ほとんどの個体はカルス化した。そのカルスよりまれに生じた不定芽が生長して小植物体となった。これら小植物体を葉, 莖頂, 根に分割し, これから多芽体を誘導するための培地を検討した。1/2MS 培地に, ベンジルアミノピューリン (BAP) 0~4.0 mg/ℓ, NAA 0~4.0 mg/ℓ, ジェランガム 2 g/ℓ, ショ糖 15 g/ℓ を添加, pH 5.8 に調整して, 100 ml の培養ビンに 50 ml ずつ分注し, 各ビンそれぞれ葉 10 枚, 莖頂 3 本, 根 3 本を置床した。培養条件は, 19±1℃, 白色蛍光灯下 3000 lux, 24時間照明とした。

4) 分割した多芽体からの発根条件の検討

3) の結果, 葉, 茎頂, 根のそれぞれの部位から誘導された多芽体を分割し, 新しい培地に置床して発根させるための培地条件の検討を行った。1/2MS培地に活性炭を0~4.0g/l, ジェランガム2g/l, ショ糖15g/lを添加, pH5.8に調整して, 100mlの三角フラスコに50mlずつ分注し, それぞれ3株ずつ置床した。培養条件は, 19±1℃, 白色蛍光灯下3000lux, 24時間照明とした。

5) 培養株の馴化

発根培地で十分に発根した株は, フラスコから取り出して培地を完全に洗い流し, プラントボックス(Magenta社製)に1/2の高さまでパーミキュライトを入れて植え付け, たっぷりと灌水して蓋をした。蓋は2週間はそのままにし, その後少しずつ開けていき, 徐々に外気に慣らした。馴化の条件は, 19±1℃, 白色蛍光灯下3000lux, 24時間照明とした。

フラスコから出して4週間後に, 親株と同じ培養土(パーミキュライト:赤玉土:パーライト=5:3:2)を用いて7.5cmポリポットに定植し, 最低温度13℃の温室内で栽培した。

結果及び考察

1) 無菌播種培地及び播種時期の検討

オリヅルスミレの生育は, 無菌播種後, 種皮に亀裂が入るまでに約30日, 根が出るまでに約30日, 子葉が展開するまでに約30日を必要とした(図2A)。1994年5月26日に播種したものは1/2, 1/4, 1/8MS培地において, 順に90, 89, 87%と高い発芽率を示した。これは, 鉢播きした場合の報告(世羅1990)が7~40%の発芽率を示したのに対し高い値であった。しかし, 播種(採取)時期が5月, 6月, 7月と遅くなるにしたがって, 発芽率は著しく低下し, 1994年7月12日に播種した場合には, どの培地においても10%以下となった。(図1)。この原因としては, 日長, 気温等の条件によって種子が休眠に入ったこと, 種子自体が未成熟で発芽能力が無いことなどが推測された。この実験で発芽した個体の殆どは, 子葉が展開した後, 根の先端から褐変し始め, 移植を行わなかったものはその後枯死した。

2) 無菌発芽苗からの不定芽誘導条件の検討

発芽後に褐変し始めた苗を生長調節物質(NAA, kinetin)を添加した培地に移植した結果, NAAの濃度が1.0mg/l以上でどの区においてもカルスが形成された(図2B)。植物体形成後の生育はkinetin 2.0mg/l添加した区において良好であり, 分化した植物体も濃い緑色を呈した。NAA 0.1mg/l以下, kinetin 0.02mg/l以下の区では根のみが伸長し, 培養60日後には褐変, 枯死が多かった。NAA 5.0mg/l, kinetin 2.0mg/lを添加した区で最も枯死数が少なく, カルス形成が盛んであり, そのカルスから分化してくる植物体も他の区の2倍程度と比較的大きくしっかりとしたものであったので, 以後の実験において, 器官培養の材料として用いるには最適であった(表1)。この実験において, 分化した植物体は数も少なく, 大量増殖という観点から見れば, 不十分な結果であった。また, 生育不良の原因として高い培養温度が考えられたため, 以後の実験からは培養温度を19±1℃に設定したインキュベーターを用いて培養を行った。

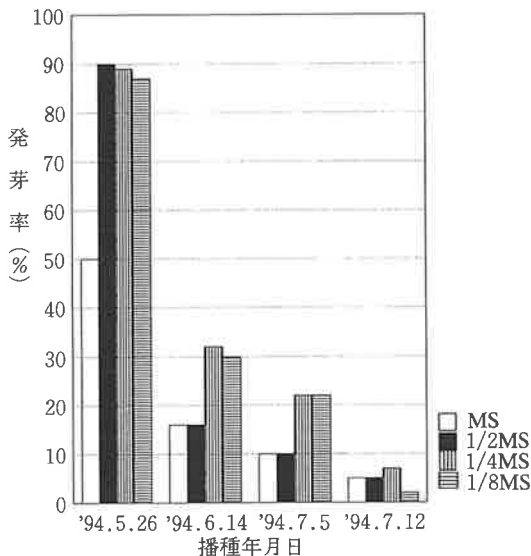


図1. オリヅルスミレの無菌播種90日後における発芽率

表2. 1/2MS 培地において生長調節物質が葉からの培養物分化に及ぼす影響 (60日後)

NAA mg/ℓ	BAP mg/ℓ		0		0.02		0.2		2.0		4.0	
	R	D	P	D	MS	D	MS	D	MS	D	MS+C	D
0	2	8	1	6	3	4	3	7	3	7	2	8
0.02	7	3	1	6	5	5	3	7	3	7	5	5
0.2	5	5	1	6	5	2	1	9	1	9	6	4
2.0	7	3	10	3	3	3	3	7	3	7	10	10
4.0	8	2	10	5	3	5	10	10	10	10	10	10

各区とも置床数10で、培養開始後60日目のMS：多芽体、P：小植物体、C：カルス、R：根、D：枯死の数を示す。

3) 葉、茎頂、根からの多芽体誘導条件の検討

①葉外植体からの器官形成

NAA を0.2mg/ℓ以上添加したほとんどの区において、培地に接した葉柄の切り口よりカルスが形成された(表2)。またBAP を0.2mg/ℓ以上、NAA を0~0.2mg/ℓ添加したほとんどの区において、盛んに多芽体が形成された(表2)。NAA 0.02mg/ℓ以下、BAP 0.02mg/ℓ以下の区では根が分化したが、その後の伸長が悪く、枯死する個体が多かった。NAA 0.2mg/ℓ、BAP 4.0mg/ℓ添加した区においてはカルスが形成され、そこから多芽体が盛んに形成されたが、展開した葉は縮れており、その後正常に生育しなかった。多芽体の高い増殖率と葉外植体からの多芽体誘導には、その後の良好な生育から、BAP 0.2mg/ℓを添加した区が最適であると考えられた(表2)。

②茎頂外植体からの器官形成

NAA を2.0mg/ℓ以上添加した区においてカル

スが形成された。多芽体は広い範囲の区で形成されたが、BAP を0.2mg/ℓ以上添加した区のほうが、生育が良好であり、その後の多芽体の増殖も盛んであった。BAP 添加0.02mg/ℓ以下の区で形成された多芽体は、シュート数も少なく、貧弱なものであった。茎頂外植体からの多芽体誘導にはBAP 0.2mg/ℓを添加した区が最適であると考えられた(表3、図2C)。

③根外植体からの器官形成

NAA を0.2mg/ℓ以上添加した区において根の切り口からカルスが、BAP を0.2mg/ℓ以上添加した区において同所から多芽体が形成された。NAA 0.02mg/ℓ以下、BAP 0.02mg/ℓ以下添加した区においては、1~2木の小植物体が形成されたが、どの区においても弱々しかった。また、NAA 0.2mg/ℓ以上及びBAP 0.2mg/ℓ以上添加した区において特にカルスの増殖が旺盛であったが、そこから分化する小植物体は黄化していた。根外植体からの

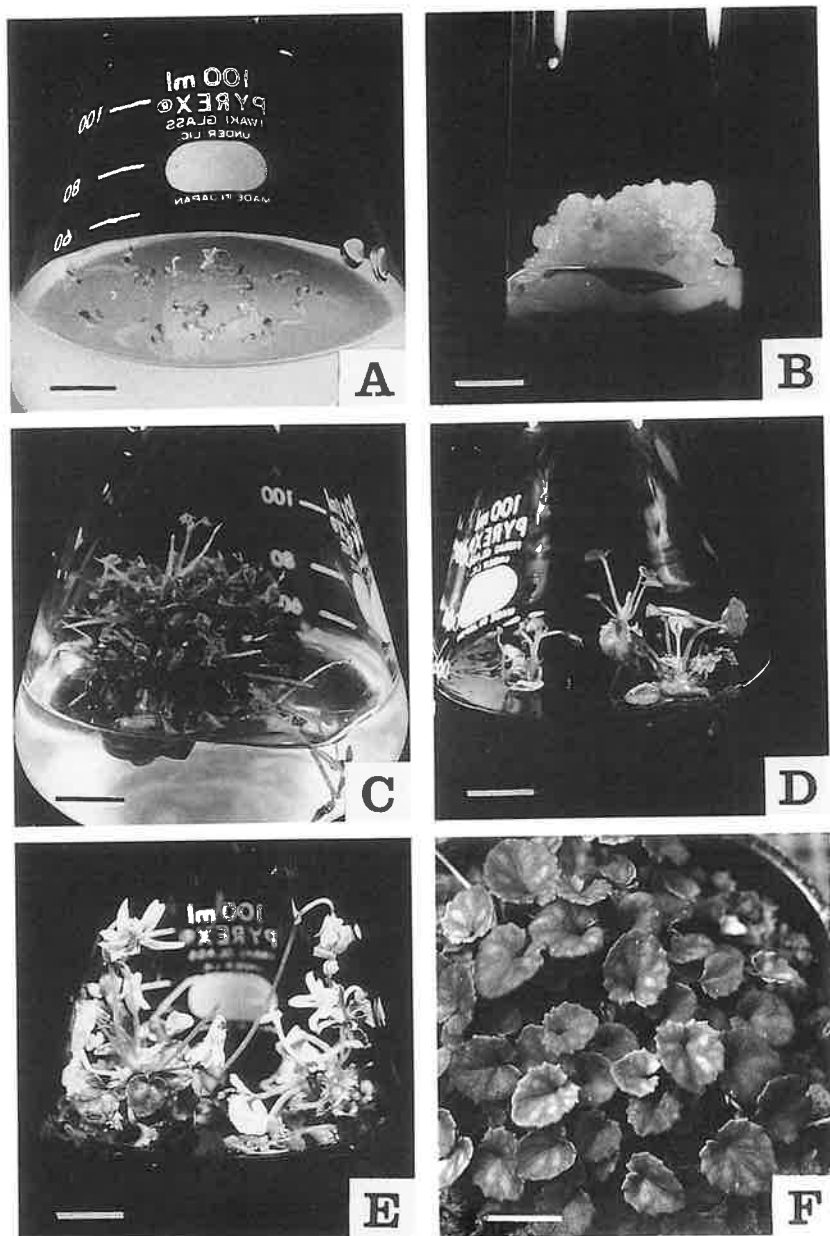


図2. オリヅルスミレ無菌培養.

A. 無菌発芽苗 (1/4MS, 播種60日後)

B. カルス化した発芽苗 (1/2MS に NAA 5 mg/l, kinetin 2 mg/l 添加, 継代60日後)

C. 茎頂外植体より形成された多芽体 (1/2MS に BAP 0.2 mg/l 添加, 置床50日後)

D. 多芽体より分割した苗 (1/2MS に活性炭 2 g/l 添加, 継代20日後)

E. フラスコ内で開花した苗 (1/2MS に活性炭 2 g/l 添加, 継代50日後)

F. 馴化後生育中の株

図中の横棒は 1 cm を示す.

表 3. 1/2MS 培地において生長調節物質が茎頂からの培養物分化に及ぼす影響 (60日後)

NAA mg/ℓ	BAP mg/ℓ		0		0.02		0.2		2.0		4.0	
0	MS+R	2	MS	2	MS	3	MS	3	MS	1		
	D	1	D	1							P	1
											D	1
0.02	MS+R	2	P	3	MS+R	3	MS	2	MS	1		
	D	1					D	1	D	2		
0.2	P	2	MS	3	MS	3	MS	2	MS	3		
	D	1					D	1				
2.0	C+R	2	P+C+R	3	MS+R	2	P+C	2	MS+C	3		
	D	1			D	1	D	1				
4.0	P+C	3	C	3	P+C+R	3	P+C	3	MS+C	3		

各区とも置床数3で、培養開始後60日目のMS：多芽体，P：小植物体，C：カルス，R：根，D：枯死の数を示す。

多芽体誘導にはBAPを0.2mg/ℓ添加した区が多芽体の増殖も旺盛で、その後の生育も良好であったので、最適であると考えられた(表4)。

葉、茎頂、根いづれの外植体からもNAAは無添加で、BAPのみを0.2mg/ℓ添加することによって、多芽体は盛んに形成された。この多芽体を分割し増殖を繰り返すことで、大量増殖が可能となった(図2D, 図3)。しかし多芽体の増殖速度が早く、40~50日に1回の間隔で継代移植を行わないと無菌的に維持できなかつた。

4) 分割した多芽体からの発根条件の検討

活性炭を添加することによって平均根長の値は大きくなり、t検定の結果、無添加(コントロール)と2.0g/ℓ活性炭添加培地で培養した区、そして無添加と4.0g/ℓ添加した区に有意水準1%以下で有意差がみられた(表5)。一方、2.0g/ℓと4.0g/ℓ添加した区に有意差はみられなかつた。また、平均発根数においては有意差はみら

れなかつた。したがって、根の伸長には活性炭を2.0g/ℓ以上添加した場合が最も適することがわかつた(表5)。この現象は、Anagnostakis(1974)によれば、活性炭によって、培養体より排出されるフェノール性物質等の生長阻害物質が吸着されることや、根が暗い方向に対して伸長する習性が強いためではないからと言われている。また、茎頂を外植体とし、NAA 0.02mg/ℓ、BAP 0.02mg/ℓ添加した区において形成された小植物体は、発根培地に置床50日後にフラスコ内で開花した(図2E)。この時期は親株の開花時期と一致しており、親株と異なる24時間照明という日長条件下で同様に開花したということは非常に興味深い。

5) 培養株の馴化

フラスコから出して、徐々に外気に慣らした培養株は、外部の環境に馴化し順調に生育したが、現在のところ、開花には至っていない(図2F)。

表4. 1/2MS 培地において生長調節物質が根からの培養物分化に及ぼす影響 (60日後)

NAA mg/ℓ	BAP mg/ℓ		0		0.02		0.2		2.0		4.0	
	0	0.02	0	0.02	0	0.02	0	0.02	0	0.02	0	0.02
0	P	2	P	2	MS	2	MS	1	MS	2	D	1
	D	1	D	1	D	1	D	2	D	1		
0.02	P	1	P	3	P	1	MS	1	MS	2	D	1
	D	2			MS	1	D	2	D	1		
0.2	C+R	3	P	1	C+R	1	P+C	1	MS+R	3		
			R	1	MS	2	D	2				
2.0	C+R	3	P+C+R	1	P+C	2	C	3	C	3		
			C+R	2	D	1						
4.0	C+R	3	C	3	C	3	P+C	2	C	3		
							D	1				

各区とも置床数3で、培養開始後60日目のMS：多芽体、P：小植物体、C：カルス、R：根、D：枯死の数を示す。

表5. 活性炭の添加が発根生育に及ぼす影響 (50日後)

活性炭 (g/ℓ)	平均発根数 (本)	平均根長 (mm)
0	4.9	9.3 *
2.0	6.5	16.1 **
4.0	7.8	15.4 **

各区とも供試数10とした

*と**の間に有意水準1%以下で有意差がみられた

今後はさらに苗条原基のような増殖体を經由した培養系を確立し、系統保存に役立てたい。

を添加した場合、根の伸長が盛んであった。

謝 辞

本研究は、広島市植物公園および、広島大学理学部附属植物遺伝子保管実験施設の方々の協力で行われました。ここに厚くお礼申し上げます。

摘 要

多芽体を用いたオリヅルスミレの大量増殖系が確立された。多芽体は無菌発芽苗を葉、茎頂、根に分割し、植物ホルモンとしてBAPを0.2mg/ℓ添加した1/2MS培地に置床することによって容易に得られた。発根培地は1/2MS培地に活性炭2.0g/ℓ

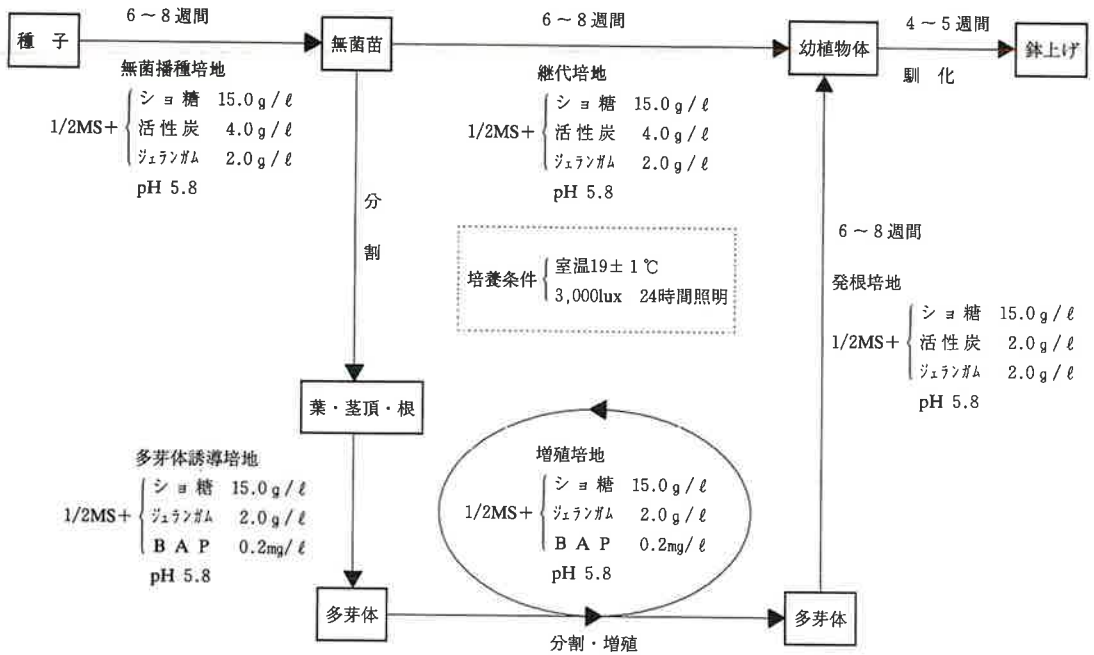


図3. 多芽体を利用したオリヅルスミレの大量増殖プロセス

Summary

Rapid-micropropagation line of *Viola stoloniflora* by multiple-shoots was here established. The multiple-shoots were induced in 1/2MS gelrite medium supplemented with 0.2mg/l BAP from the explants of leaves, shoot-meristems and roots from axenic seedlings grown on 1/2MS agar medium with 15g/l sucrose at pH5.8 at 22 ± 2°C. Root formation was most efficiently induced in 1/2MS gelrite medium with 15g/l sucrose and 2.0mg/l charcoal.

参考文献

Anagnostakis, S.L. 1974. Haploid plants from anthers of tobacco-enhancement with charcoal. *Planta* 115:281-283.

Murashige, T. and F. Skoog 1962. A revised medium for rapid growth and bioassays with tobacco tissue cultures. *Physiol. Plant* 15:473-497.

Sato, T., C. K. Oh, H. Miyake, and T. Taniguchi 1995. Regeneration of plantlets from petiole callus of wild viola (*Viola patrinii* DC.). *Plant Cell Rep.* 14: 768-772.

世羅徹哉1989。オリヅルスミレの栽培記録。広島市植物公園栽培記録第10号。10-11。

世羅徹哉1990。オリヅルスミレの増殖について広島市植物公園栽培記録第11号。7-8。

Yokota, M., S.Higa, H.Yoshioka and K.Shimabuku 1988. *Viola stoloniflora* (Violaceae), a new species from the Ryukyus. *Bot. Mag. Tokyo* 101:1-8.

広島県の植物方言と民族*

榎本克彦¹⁾

A Local Name of Plants and Ethnobotany in Hiroshima Prefecture*

Katsuhiko Enomoto¹⁾

編者まえがき

榎本克彦氏は、広島市植物公園建設事務所時代の昭和49年から昭和54年3月31日まで同公園に勤務され、おもに植物の導入や近郊の野生植物の分布調査に力を注がれました。その後、平成3年から再び植物公園に勤務されましたが、平成4年1月、勤務中に急逝されました。

氏は、植物と人の暮らしとの関わりに造詣が深く、広島県内の植物方言や、植物の古い利用法について、現地での聞き取り調査を続けてこられました。この調査結果はA4版134ページにのぼるもので、「植物と民族・草本編」、「植物と民族・樹木編」、「戸河内の植物と民族、その他」の3編から成ります。この結果は、論文としてまとめられたものではありませんが、県内の植物方言と民族に関する数少ない貴重な資料と考えられます。そこで、今後この分野の研究者に広く活用していただくために、「広島県の植物方言と民族」と題して掲載することになりました。長年に渡り地道な調査を続けられた榎本克彦氏に敬意を表するとともに、貴重な資料を大切に保管された令嬢榎本緑氏に感謝します。

ここでは、「植物と民族・草本編、及び樹木編」に記録された51種（表参照）を掲載した。各種の方言一覧表は、結果をもとに編者が作成した。この際、

聞き取りを行った個人名（表中の被採集者名）は割愛、年齢のみにとどめた。

本編に掲載されている種

草 本 編	樹 木 編
ヒガンバナ	サルトリイバラ
チガヤ	クサギ
リュウノヒゲ	キブシ
ヤブカンゾウ	ソヨゴ
ツユクサ	アセビ
シュンラン	ナツハゼ
スベリヒユ	ヒサカキ
カラムシ	エゴノキ
イタドリ	ネコヤナギ
ドクダミ	サルナシ
ハコベ	ネムノキ
ゲンノショウコ	コシアブラ
ウツボグサ	アカメガシワ
オタカラコウ	タムシバ
ウラジロ	タラノキ
ツクシ・スギナ	ザイフリボク
トクサ	ヤブツバキ
ヒカゲノカズラ	イヌツゲ
	ムクロジ
	カクレミノ
	シラカシ
	ザクロ
	ユズ
	ウバメガシ
	ヤツデ
	エノキ
	カキ
	クチナシ
	ネジキ
	ビナンカズラ
	イヌビワ
	ネズミサシ
	モミ

* Contribution from The Hiroshima Botanical Garden No. 60.

1) The Hiroshima Botanical Garden.

Bulletin of The Hiroshima Botanical Garden. No. 17: 9-43, 1997

広島県の植物方言と民族

(1) 草本編

ヒガンバナ *Lycoris radiata* Herb.

方 言	方 言 採 集 地	被採集者年齢
アタマイタ	三次市廻神町泉水	7 3
カゼヒキバナ	御調郡久井町下津	8 5 当時
カブレ	大竹市三ッ石	7 3
カブレんショウ	(安佐北区三入横川出身)	4 6
	(安佐北区可部町東綾が谷出身)	7 4
	安佐北区安佐町久地	6 5 当時
グイナ	安佐北区白木町栃谷	6 9
スズバナ	尾道市美郷町白江	6 1 当時
	府中市河佐	8 0 当時
チョウチンバナ	大竹市平瀬	9 3

和名の由来

- ・ 秋のお彼岸のころに咲くところからヒガンバナの名があるが実際に年によっては8月の下旬に花を見ることができ、10月の上旬ころが開花のピークとなる年もあるからその名の由来に疑問を持つこともある。
- ・ 一名マンジュシャゲは梵語の天上の華、赤い花の意。

「赤い花なら まんじゅしゃげ オランダ屋敷に雨が降る」梅木三郎の作った詩は流行歌となり一躍有名となった。

この名は、牧野新日本植物図鑑によると「マンジュウシャゲ(曼珠沙華)は赤花を表す梵語によるものである。しかしそのもとは葉が出ない内にまず花を咲かせる意味で、先ず咲き、または真っ先が仏教との関係で上記の文字があてられたのであろうか」としている。

利 用

- ・ 著者自身この球根掘りの経験がある。寒い雪の降るころに決まったように近所の老婦から頼まれて掘っては水洗いしてブリキのバケツに2杯づつ持って行きよったものである。子供心に小遣いをもらうのが嬉しかったからであろうが、動力水車でつき、水でさらしてデンプンを探っていた作業の一部始終を記憶している。ムシパンやアメになり味わったこともある。

球根を掘っていてかぶれたことはないが、花のさかりのころ花茎を折ってあそんだ時には発熱もあり、苦しい思い出がある。

その他

- ・ 「葉はモメラいうが、花はヒガンバナいうで」
山口県玖郡美和町向原 7 5 歳 平成3年12月30日取材
- ・ 万葉集に「いちしの花」と詠まれた歌が一首。いちしについては古來定説のない植物であったが、昭和

22年、牧野富太郎がアララギ40巻9号にヒガンバナの説を提唱した。牧野は、諸条件を考定してヒガンバナの説をたてたのであるが、地方で里名として、ヒガンバナを「いちし」に近い言葉で呼ぶ実例がほしいと訴えた。

「万葉集」 「路の辺のいちしの花の
いちしろく人皆知りぬ
わが恋妻を」 作者不詳

チガヤ *Imperata cylindrica* (L.) Beauv.

方 言	方 言 採 集 地	被採集者年齢
カヤノホ	山県郡戸河内町平見谷	74
ジーネゴ	愛媛県越智郡大三島町宮浦	60
ズイビ	山県郡芸北町下郷ニホヘ	83
ズボ	山県郡加計町月の子	76
	山県郡芸北町下郷ニホヘ	83
	山県郡戸河内町猪山	68
	山県郡加計町温井 (寺領出身)	77
ズボーナ	高田郡八千代町畑	85
	大竹市三ツ石	72
	大竹市平瀬	93
	大竹市栗谷後原	90
	大竹市栗谷 (上平良出身)	56
	大竹市前飯谷	75
	安佐北区綾が谷 (東綾が谷出身)	74
	佐伯郡佐伯町玖島上大谷口	60
	山口県玖珂郡美和町向原	75
	岩国市通津町畑 (安佐北区三入横川出身)	51 46
ズンバイ	三次市廻神町泉水	73
	三次市太田幸町五反田	73
ズンベラ	(山口県大島郡橘町浮島出身)	44
ツボナ	安佐北区綾が谷 (東綾が谷出身)	74
ノボシ	(比婆郡東城町小奴可出身)	62

その他

- ・ うた「ズボ ヌイタ ホウヌイタ ウマノチンボ ヒキヌイタ」
——安佐北区三入出身者より。
- ・ うた「ズボーナ ズボーナ ハーナノナーカノズボーナ……」
「ズボーナ ズボーナ ハーナノウエノズボーナ
ダーレガトッテターペール ワーシガトッテ ターペーエール」
- ・ 歌いながら鼻の上にむいて真っ白な実を乗せて食べるとおいしいといいあつては口にしてたものであった。白い実がやや赤みを帯びるとオニが食うので食べられないといていた。

リュウノヒゲ *Ophiopogon japonicus* (L. f.) Ker-Gawl.

方言	方言採集地	被採集者年齢
オクニトッサン	岩国市通津町本呂尾	62以上
ガクマンドウ	安佐南区沼田町阿戸	42
	山県郡戸河内町押が峠	77
	山県郡加計町温井	77
	山県郡戸河内町猪山	68
カンダマ	大竹市栗谷	55
クスダマ	(神石郡三和町父木野出身)	56
ゴショウダマ	(比婆郡東城町小奴可出身)	62
	三次市廻神町泉水	73
	(安佐北区可部町綾が谷出身)	75
	三次市太田幸町五反田	73
ジュウノタマ	大竹市栗谷後原	90
ジョウゴダマ	庄原市掛田町	
ジュウダマ	山口県玖珂郡美和町向原	75
	山口県玖珂郡美和町向原	82
	安佐北区白木町栃谷	69
	安佐北区白木町大迫	65
ジュンタマ	大竹市前飯谷	75
ジュンタン	大竹市栗谷後原	90
ススダマ	安芸区瀬野川畑賀	84
ツウツウダマ	双三郡三和町上滝	70
バクマンドウ	安佐南区沼田町阿戸	42
ビンツウ	大竹市三ッ石	72
メンツウ	(大竹市防鹿出身)	69

利 用

- ・ 草ぶき屋根の雨だれの泥はねにこのリュウノヒゲが多く使われていたが、瓦屋根になってからトヒが普及して今日あまり見られなくなってしまった。その名残を見受けることもある。
- ・ 生薬名はバクモンドウ（麦門冬）と呼び、滋養・強壯・咳止めの薬効がしられる。

その他

- ・ リュウノヒゲの矮性品種である玉竜は昭和40年代のはじめに玉利氏によってアメリカから導入されたのがはじまりであることはあまり知られていない。
- ・ 漢名は書帯草と書き机上の上品なかざりものにするからだとされる。
- ・ 「ドロが崩れる所に植えておる。」裏のヤブのそばに案内されての話であった
——三次市太田幸町五反田 当時73歳
- ・ 「私の子供のころ、篠鉄砲の玉はリュウノヒゲの青い実でジョウゴ玉と呼んでいました。ジョウゴは上戸で上流社会或は高貴を意味する古語で、下戸は今も残っているが、上戸はこの語以外に知りません。ヒヨドリジョウゴと共に色の気品をよく現していると思います。」

———庄原市掛田町

- ・ 「ピンツウデッポウの玉に使いよった。」

———大竹市三ッ石 当時72歳

ヤブカンゾウ *Hemerocallis fulva* L. var. *kwanso* Regel

方言	方言採集地	被採集者年齢	採集年月日
ガンソ	山県郡芸北町大暮	66	平成3年8月23日
ガンソウ	山県郡加計町温井	72	平成3年8月23日
	山県郡加計町月の子	76	

ツユクサ *Commelina communis* L. var. *communis*

方言	方言採集地	被採集者年齢	採集年月日
カマツカ	愛媛県越智郡大三島町宮浦	60	平成3年9月13日
カモツカ	山県郡加計町月の子	76	
	山県郡戸河内町猪山	68	
	山県郡戸河内町平見谷	74	
ハナガラ	大竹市三ッ石	72	平成3年9月27日

シュラン *Cymbidium goeringii* Rchb.f.

方言	方言採集地	被採集者年齢	採集年月日
ジートバー	竹原市宗越町	80	平成3年12月31日
ジーババ	豊田郡本郷町上谷(わだに)	70	平成3年12月31日
ジーバー	安佐北区白木町大迫	65	平成4年1月12日
ハックリ	安佐北区白木町栃谷	69	平成4年1月12日
ハコリ	山口県玖珂郡美和町向原	82	平成3年12月30日
ハコリボウズ	山口県玖珂郡美和町向原	75	平成3年12月30日
ハッコリボウズ	山口県玖珂郡美和町向原	75	平成3年12月30日
ホウクリ	竹原市宗越町	80	平成3年12月31日
	安芸区瀬野川畑賀	84	昭和59年1月28日

利 用

- ・ 「花の茎は食べられよう。皮をへいで生で食べよった。子どものころ」
———竹原市宗越町で聞き取り 当時80歳
- ・ 「川でゾウキンやなんぞを洗いよったら、バリバリいうて手が割れよってそりゃあ、手がカクイみたいになりよって……」頼った日々を語る
———安芸区瀬野川畑賀で昭和59年1月28日に聞き取り 当時84歳

スベリヒユ *Portulaca oleracea* L. var. *oleracea*

方 言	方 言 採 集 地	被採集者年齢
スベリビー	高田郡八千代町畑	8 5
タコグサ	高田郡八千代町畑 (安佐北区可部町綾が谷出身)	8 5 7 4
ドンドロビー	愛媛県越智郡大三島町宮浦	6 0
ハエトリグサ	双三郡三和町嚙上滝 三次市廻神町泉水	7 0 7 3
ヒーナ	大竹市三ツ石 大竹市平瀬	7 2 9 3
ヒズリ	山県郡戸河内町平見谷	7 4
ヒデリグサ	高田郡八千代町畑	8 5

その他

- ・ 「わしの親の代まではよう食べておった。」
———大竹市平瀬で聞き取り 当時 9 3 歳
- ・ 「今日はタコ料理じゃ、言うてよう食べさせられておった。」
———安佐北区可部町綾が谷出身者より 当時 7 4 歳
- ・ 「ブタが喜んで喰いますよ。」
———山県郡戸河内町平見谷で聞き取り 当時 7 4 歳
- ・ 広島市の平和大通りの大花壇に平成 2 年の初夏から見慣れない草花が一斉に植えられて、反響をよんだのがスベリヒユの兄弟分に当たるハナスベリヒユであった。しかし、このルーツがさだかでなく開花習性など正確を記した資料がなく右往左往したのであった。

カラムシ *Boehmeria nipononivea* Koidz.

方 言	方 言 採 集 地	被採集者年齢
シロウバ	大竹市三ツ石 大竹市平瀬	7 2 9 3
ムシオ	山県郡戸河内町押ヶ峠 山県郡戸河内町寺領 山県郡戸河内町遊谷 (安北区三入横川出身)	7 9 8 8 8 3 4 6

和名の由来

- ・ 「牧野新日本植物図鑑」によれば「莖蒸の意味で、皮のある莖（カラ）を蒸して皮をはぎ取るからである。一名マオは真麻で真正の麻という意味である。」

利 用

- ・ 中学 1 年生までわが家ではヤギを飼っていた。多い時には 3 頭いたので草刈りは兄と私のいわば日課であったから、ヤギの大好物は良く知っていた。このカラムシをムシオと呼んでいたが、これを刈って帰

るやヤギはメイ、メイと愛嬌をふりまきせがむのであった。もっともムシヨオは石垣の間に育ち草刈りしやすいこともあり、しかも量が多いので比較的短時間でメゴと呼ぶ竹かごいっぱいにすることができるしヤギが喜ぶからさいさい刈りとるものの、秋遅くには別の草と混ぜてやらないと、繊維質なところからより食いして残すこともあった。

このムシヨウは子供たちにとっては楽しい遊び草でもあった。幼いころは晩秋のころに毛糸を身に着けると「勲章ごっこ」がはじまる。今風にいえば「ワッペンごっこ」といったほうがわかりやすいかも知れないが、葉の裏面を毛糸のセーターに張り付けると容易にくっつくところから勲章にみたてての遊びであったから、初冬の遊びであったかも知れない。大きい葉が見つかり、ぴったりとくっ付くとあたかも大将になった気分で、いくつもいくつも張っていたものだった。

イタドリ *Reynoutria japonica* Houtt. var. *japonica*

方言	方言採集地	被採集者年齢
イタイドリ	山県郡芸北町西八幡	8 5
イタズラ	豊田郡安浦町沖の浜	8 4
イタヅリ	山県郡加計町月の子 佐伯郡佐伯町玖島上大谷口	7 6 6 0
カッポウ	(安佐北区可部町綾ガ谷出身)	7 4
カッポン	(廿日市市新宮出身) 竹原市宗越町	3 7 8 0
カラダケ	高田郡向原町坂	
コンコン	山県郡戸河内町那須 山県郡加計町温井 山県郡戸河内町猪山 山県郡加計町杉の泊 山県郡加計町月の子 山県郡戸河内町小板 (山県郡戸河内町横川馬場出身) 佐伯郡吉和村熊崎	8 5 7 7 6 8 9 1 7 6 7 7 5 6 8 3
シャジッポウ	(比婆郡東城町小奴可出身)	6 2
スイバ	(東区牛田出身)	6 5
スカンボ	(島根県簸川郡大社町出身)	5 1
タジッポウ	三次市廻神町泉水	7 3
タジッポウ	双三郡三和町上滝	7 0
タケッポー	(安佐北区三入出身)	4 6
タケッポポー	(安佐北区三入出身)	4 6
タジンポウ	(神石郡三和町父木野出身)	5 6
タズナ	豊田郡本郷町上谷(わだに)	7 0
タンボコ	山県郡加計町杉の泊 山県郡芸北町西八幡 山県郡芸北町細見下郷二ホへ 山県郡戸河内町平見谷 山県郡芸北町大暮	9 1 8 5 8 3 7 4 6 6
トントン	(佐伯郡湯来町白砂出身)	5 9
ハイタナ	岩国市通津町畑 岩国市通津市本呂尾	5 1 6 2

方 言	方 言 採 集 地	被採集者年齢
ハータナ	愛媛県越智郡大三島町宮浦	6 0
	豊田郡瀬戸田町大元町 (因島市金山出身)	6 9
ポッカ	安佐南区沼田町阿戸	4 2
ポッキン	安佐南区沼田町阿戸	4 2
ボンカン	豊田郡安浦町沖の浜	8 4
ボンタン	豊田郡瀬戸田町大元町 (因島市金山出身)	6 9
ポンプラ	大竹市三ッ石	7 2
	(大竹市黒川出身)	5 0
	(大竹市防鹿出身)	6 9
ボンボン	(山口県大島郡橋町浮島出身)	4 4

ドクダミ *Houttuynia cordata* Thunb.

方 言	方 言 採 集 地	被採集者年齢
イヌノヘグサ	(神石郡三和町父木野出身)	5 6
	比婆郡東城町始終郷	6 2 当時
	(比婆郡東城町小奴可出身)	6 2
ジュウヤク	愛媛県越智郡大三島町宮浦	6 0
	島根県邑智郡羽須美村旅迫	9 4 当時
	島根県邑智郡瑞穂町市木	7 9 当時
	山県郡大朝町岩戸	7 7 当時
ニュードウグサ	山県郡加計町月の子	7 6 当時
	山県郡戸河内町寺領	8 8
	山県郡戸河内町遊谷	8 3
	(山県郡戸河内町横川馬場出身)	5 6
ニュードウグサ	双三郡三和町上滝	7 0
	(神石郡三和町父木野出身)	5 6
ポッポウグサ	愛媛県越智郡大三島町宮浦	6 0

利 用

- ・ 土用のうしの日の風呂湯に入れた植物について「クサギナ、ヨモギ、オンパコ、イヌノヘグサに、ほら腹ぐすりにしょう、ピンクの可愛らしい花の咲く……」としばらく考え「ミコシグサ、あとは……とにかく7種類は親らはいれておった。」という。また、別の古老は、「クサギナ、オンパコ、ヨモギ、にイヌノヘグサに……後は忘れましたよ。7種類ときいてましたよ。」

————比婆郡東城町始終郷で聞き取り。

ハコベ *Stellaria neglecta* Weihe

方 言	方 言 採 集 地	被採集者年齢
ヒズリ	神石郡三和町父木野	5 6
ヒヨコグサ	安佐北区三入横川	4 6

その他

- ・ 春の七草は中国の故事をとりいれた宮中の行事であった。緑にとぼしい寒中に野原で食べられる野草を採り集めてカユのなかに入れて食べてその年の邪気を払い願う。

ゲンノショウコ *Geranium nepalense* Sweet ssp. *thunbergii* (Sieb. et Zucc.) Hara

方 言	方 言 採 集 地	被採集者年齢
ミコシグサ	(比婆郡東城町小奴可出身)	6 2

ウツボグサ *Prunella vulgaris* L. ssp. *asiatica* Hara

方 言	方 言 採 集 地	被採集者年齢
アメスイバ	庄原市峯田町	*
ウマクソバナ	高田郡大朝町田原	7 9 当時
カゴソウ	山口県玖珂郡美川町こかべ 山県郡戸河内町坂根 安佐南区沼田町伴三城田	6 6 当時 8 7 7 2 当時
スイスイバ	高田郡美土里町塩瀬	6 2 当時
スイバナ	山県郡芸北町樽床 庄原市吉備谷	7 7 6 6 当時
チイチバ	高田郡美土里町塩瀬	6 2 当時
チチグサ	安佐北区安佐町小河内箕越 安佐南区沼田町伴三城田	6 2 当時 7 2 当時
チチグサ	安佐北区安佐町久地 (東広島市高屋町造賀出身)	3 7 当時
チチ	賀茂郡大和町上徳良	7 5 当時
チチバナ	賀茂郡大和町上徳良 神石郡油木町平井岡区	7 5 当時 7 6 当時
チュウチュウ	三原市沼田西惣定	8 7 当時
テコロバナ	山県郡芸北町樽床	7 7
ヘビノマクラ	山口県玖珂郡美川町こかべ	6 6 当時
ミコノスズ	庄原市峯田町	*

*山田次三遺稿集より

和名の由来

- ・ 花穂の形が武士の使っていた弓矢を入れて背負った鞆（うつぼ）に似ているところからの名である。

- ・ 別名カコソウは夏枯草の意、花穂は夏に枯れて長くそのままの状態が残っているところからの名である。

利 用

- ・ 「蜜も吸うたがの、草は毒下しでもりん病にやあ効きますで、利尿にもええ。」
——安佐南区沼田町伴三城田で聞き取り
- ・ 「テコロバナとかスイバナといいますが、ちょっとワラを叩くテコロという木槌に似ているからテコロバナいうんでしょ。花を採って干しておくくと利尿にはええ。」
——山県郡芸北町樽床で聞き取り
- ・ 「りん病・しょうかちにはええみたいです。この辺じゃあウマクソバナいうていましたよ。」
——高田郡大朝町田原で聞き取り

あそび

- ・ 「子供のころに採っちゃすいよった。」
——高田郡美土里町塩瀬で聞き取り
- ・ 「オオアリの尻を絞って、この花につけると花がピンクに変色する。」
——比婆郡東城町宇山有頭谷在住（当時48歳）から聞き取り。

オタカラコウ *Ligularia fischeri* (Ledeb.) Turcz.

方 言	方 言 採 集 地	被採集者年齢
ゴウノハ	山県郡芸北町大暮	6 6
	山県郡戸河内町平見谷	7 4
	山県郡戸河内町猪山	6 8
	山県郡戸河内町松原蔵座	8 0
ヤマゴンボウ	山県郡戸河内町那須	7 1
ワンプキ	(山県郡戸河内町横川馬場出身)	5 6

和名の由来

- ・ オタカラコウの名は、「牧野新日本植物図鑑」によると「雄タカラ香で雌タカラコウに比べて強壯であるため。タカラコウは龍腦香のことで、この類の根茎が同じ香がするからだ」と古書にある。」

利 用

- ・ 「昔陰干しして便所の落とし紙につこうとった。」
山県郡戸河内町松原蔵座で採集 80歳
- ・ 「落とし紙にするくらい。」
山県郡戸河内町横川馬場出身から採集 56歳

その他

- ・ 夏過ぎて葉へいを乾燥させて縦に裂いて縛ってみたら丈夫なナワが完成したがその辺の話は聞くことができなかった。

ウラジロ *Gleichenia japonica* Spreng

方言	方言採集地	被採集者年齢	採集年月日
オオシダ	安佐北区安佐町久地	66 当時	
	岩国市通津町畑	51	
ショウガツサン	大竹市栗谷後原	90	
ナバシダ	安佐北区安佐町久地三国	85 当時	
	安佐北区三入山田	46	
モロバ	大竹市三っ石	72	平成3年9月27日
	大竹市栗谷後原	90	平成3年10月11日
	山口県玖珂郡大畠	63 当時	
	岩国市通津町畑	51	
モロバイ	大竹市	68 当時	
モロブキ	(長崎市城栄町出身)	39	
モロモキ	山口県徳山市給島川端	70 当時	
	同	71 当時	
モロンバ	佐伯郡大柿町	80 当時	

利用

- ・ 「そりゃあ、オオシダは腐らんれえ、木の橋をこしらえ土を乗せる時にゃあ、えっと山から刈って来て敷いたものです。」

———安佐北区安佐町久地で聞き取り 当時66歳

その他

- ・ わたしの親友でもある高知県立牧野植物園の稲垣典年氏(51)はシダの専門家でもある。ウラジロの面白い話題はないかと聞いたところ、「ウラジロの主軸を折ることなく、ひとつひとつの葉が相対する完全な葉の跡を追って数えてみると、なんと50対以上に及んだ。」という。この話を聞いて後、ウラジロの大群落を観察してみるとせいぜい2~3年までの葉が青々としており、それ以上は枯れている。

すでに10余年前になろうか、巖島の南側の山火事は意外に広い範囲であったが、この火事を大きくした要因のひとつがウラジロの大群落なのではと、あるマスコミのインタビューに答えたことがあった。よほどユニークな意見であったとみえて他社のインタビューを求められたほどであった。稲垣氏の話が思わぬ発展をみたのである。

巖島で思い出すのが、対岸の大野町のウラジロの葉柄の細工ものである。この葉柄からチャワンメゴと呼ぶ、食器の水切りに使うカゴがさかんに作られていたのであった。わが家でも長年使っていたが丈夫で長持ちしていたものであったと記憶している。また、どこで作られていたのかは知らないが、結婚式の引き出物のくだものカゴもウラジロの葉柄であったが最近ほとんど見ることはなくなった。

- ・ 対馬の植物方言の記録をされた植物学者の故前川文夫氏によれば、「モロモク」を報告しており、その語源について「群落を作る葉がみんな一様に面を揃えて向けているからモロムキ(諸向き)であり、その転化した方言である。」という。

ツクシ・スギナ *Equisetum arvense* L.

方 言	方 言 採 集 地	被採集者年齢
ホウシ	豊田郡本郷町上谷 (わだに)	7 0

トクサ *Equisetum hyemale* L.

方 言	方 言 採 集 地	被採集者年齢
ギシギシ	甲奴	村岡浅夫氏 記録
ツギツギボウシ	千代田	村岡浅夫氏 記録
ツギメグサ	佐伯郡佐伯町友田	6 3
トスベリ	豊平	村岡浅夫氏 記録
ハスリ	竹原市仁賀町下仁賀	7 8
ハトギグサ	庄原	村岡浅夫氏 記録

利 用

- 「この辺では、昔からハスリ言うての歯ブラシ代わりに使いよりましたよ。ひと節抜いてさいてからね、しゃりしゃりしよった。山のなかの人じゃけえ、何でも買うことはありませんでしたよ。ただし50~60年も前の話ですが…」

———竹原市仁賀町下仁賀で聞き取り 当時78歳
- 「子供のころこのふしを離して、また元のとうりにして、どこを継いだかと遊びよった。わしらはツギメグサじゃいいよった。ほかの使い道は知らん。」

———佐伯郡佐伯町友田で1988年1月11日に聞き取り 当時63歳
- 「名は忘れてしもうたが、もの好きな人は置物を作ったりする時にこりょう研くのの使いよった。」「貸してみんさい」と手持ちの鎌の柄を研いで見せ「木やなんかなんでも研くときれいになりましようよ、歯も研きよったが…」

———高田郡八千代町上根で1988年1月3日に聞き取り 87歳
- 「子供のころは歯をみがかんにゃあ言うて、よう採っては遊びよったが……今頃はよほど古い家の庭でないとなはずです。」

———山県郡千代田町南方で1988年1月3日に聞き取り 当時79歳
- 「今は何こそ不自由のない時代じゃが、私らが子供のころは歯を研くのの使いよりましたよ。名前は年をとると忘れましたが…生け花にも最近は使われる方もありましようが、煎じて飲めばどうこういう話は聞いたこともありません。」

———佐伯郡佐伯町友田で1988年1月11日に聞き取り 当時80歳
- 下駄作りが盛んだった一帯を歩いて出会った今津さんは「嫁に来たころにはゲタのほとりの角を研くのによく使いよりましたよ。トクサはね。」

———安佐北区玖村で1988年1月11日に聞き取り 当時78歳
- 下駄作りを長年続けられ昭和49年に止められた岡本さんに最後の工程であるトクサガケについて聞くと「さかめを消すために使うが買うと高いもので、よほどのことでないと使うことはなかった。」

———安佐北区可部町上南原で1988年2月11日に聞き取り 当時66歳

このトクサガケは、ホオノキを厚さ1cm、縦10cm、横5cmに切り、その上にトクサを裂いて張りつけたものであった。

- ・ 先般宮城県仙台市の仙台市野草園（同市茂ヶ崎大年寺山）を訪ねて園長の菅野邦夫さんにトクサの話を知った。「仙台では、埋もれ木を加工して置物などにするが、これを研ぐのにトクサを使い、さらにムクの葉を使い仕上げておられる。」という。
- ・ わたしの母はかつて庭に多くトクサを育てて、毎年春と秋の彼岸が近づくときシンチュウ製の仏具の青錆落としに使っていたのであった。
- ・ 安佐北区安佐町久地小野原の薬師さんは、眼の病気を直してくれるというところから多くの信仰を集めていたという。この薬師さんからさずかる薬がトクサの煎じた液であったことは古老たちの記憶のなかに生きつづけている。
- ・ 井波一雄著 「いま むかし 暮らしの小道具・植物事典」毎日新聞発行 昭和60年印刷によると、この本の磨き材になるトクサの項には「塩湯で煮て乾かし、木竹や角（つ）骨材などを研磨するのに用いられた。今でも、コケシ作りの工場の旋盤の片すみなどに、トクサの小束が常備され、仕上げ磨きにサンドペーパーのように使われていることに気づいた人もあるだろう。コケシ作りの東北の里に、トクサが多いのも偶然の一致か。」と解説している。
- ・ トクサは研草とか木賊と書く。ケイ酸塩を含んだ茎が物を磨くのに使われることから研石に代用できる草の意。茎を温湯で煮て乾かして磨くのに使われる。薬用として利尿、下痢止め、眼病に効くと言われる。

ヒカゲノカズラ *Lycopodium clavatum* L.

方 言	方 言 採 集 地	被採集者年齢
キツネノオ	山県郡加計町月の子	76
	山県郡戸河内町猪山	68
キツネノオッパチ	山県郡加計町月の子	76
キツネノオビ	竹原市宗越町	80
キツネノシッポ	山県郡戸河内町猪山	68
	豊田郡本郷町上谷（わだに）	70
	安佐北区白木町大迫	65
キツネノスルギ	山県郡戸河内町那須	79
	（スルギとは脱け殻の意）	
キツネノタスキ	山県郡戸河内町松原蔵座	80
	（山県郡戸河内町横川馬場出身）	56
キツネノヒモ	竹原市宗越町	80
キツネノマイカケ	山県郡戸河内町那須	71
キツネノマエカケ	山口県玖珂郡美和町向原	82
キツネノマエダレ	岩国市通津町畑	51
ヤママイダレ	山口県玖珂郡美和町向原	75

利 用

- ・ 「干しておいてショウカチの薬にする。」
 ————山県郡戸河内町松原蔵座で聞き取り 当時80歳

その他

- ・ やや山かげのしめっぽい斜面であまり雑草の生えていない場所に自生している。近年林道開発が進み、その生育場所はむしろ増える傾向にある。しかし、この生育している場所を幼少時代なかなか知ることができずに探し歩き回ったことがある。昭和の30年代のはじめころだったろうか、キンギョの繁殖ブームがあった時産卵さすために必要であったからである。5月下旬ころ雄のキンギョが盛んに雌を追いかけまわすようになるとすぐにキツネノタスキと呼んでいたヒカゲノカズラを池の中に入れていたのであった。卵をこのカズラに産みつけるやいなや水槽に入れて稚魚の誕生を待ったのであった。

(2) 樹木編

サルトリイバラ *Smlax china L.*

方 言	方 言 採 集 地	被採集者年齢
カタラ	大竹市前飯谷	7 5
	山県郡戸河内町押が峠	7 9
	佐伯郡吉和村熊崎	8 3
	佐伯郡佐伯町玖島上大谷口	6 0
カタライギ	山県郡戸河内町那須	7 9
カタラシバ	(安佐北区可部町綾が谷出身)	7 4
	山県郡戸河内町寺領	8 8
	山県郡戸河内町遊谷	8 3
	山県郡戸河内町那須	7 1
カタラノハ	(安佐北区三入横川出身)	4 6
	大竹市栗谷 (上平良出身)	5 5
カタラ	大竹市本町	6 9
クイノハ	三次市廻神町泉水	7 3
	三次市太田幸町五反田	7 3
サルトイグイ	高田郡八千代町畑	8 5
タタラ	(山県郡戸河内町横川馬場出身)	5 6
タタラグイ	(比婆郡東城町小奴可出身)	6 2
タタラシバ	山県郡戸河内町猪山	6 8
	山県郡戸河内町松原蔵座	8 0
	山県郡戸河内町那須	7 1

その他

- ・ 船越町一帯には「わしが山に行きゃあ、カタロが止める カタロ止めるな日が暮れる」といったサルトリイバラの葉を採る時の歌が伝えられている。
- ・ 私自身よくこのカタラノハを採りに歩いていたものであった。母が明日はカタラモチを作ろうかと言う声に姉等は石臼で米粉を挽き、母はあんことなる小豆を煮はじめる。そして私がカタラノハ採りと分担がほぼ決まっていた。しかし、このカタラノハ採りのなかばプロがおられて、梅雨の終わりころから大量に

出荷されていることもあり、よほど探さないと大きな葉がないが、毎年採り歩きしていると穴場を知ってくるのでさほど苦にはならなかった。なにしろカタラモチが食べられるのが楽しみであったからかも知れない。

- ちょっと谷すじの土地の肥えた場所ではやや大きい葉のカタラノハが得られる。数株も出会えれば家族分は確保できたのであるが、田舎の習慣もあって近所に配ることもあり、見越して集める必要もあった。
- 乾燥したところでは葉こそ小さいものの秋には果実がよくなり、リンゴ以上にうまいものである。赤く熟す時期まで待ちきれず、青いうちに酸っぱいながらも口にしていたものであった。しかし、最近では切り花として実の付いた枝がどっとフラワーショップに出回っている。栽培されたものとは思えないから山から切り取られたものだろうか、と、ちょっぴり心寂しい時代になったのではと考えるのである。

クサギ *Clerodendrum trichotomum* Thunb.

方 言	方 言 採 集 地	被採集者年齢
クサギナ	高田郡吉田町多治比	68 当時
	山県郡戸河内町那須	79
	山県郡戸河内町押ガ埜	79
	(比婆郡東城町小奴可出身)	62
	愛媛県越智郡大三島町宮浦	60
	大竹市前飯谷	75
	双三郡三和町上滝	70
	山県郡大朝町岩戸	77 当時
	同	72 当時

利 用

- 巖島神社の神事の「島巡り」の時、青海苔浦で供される昼食の副食として、クサギの浸師が出る習わしがある。

———村岡浅夫(1972) p38.

- 夏の土用のうしの日の風呂湯について「土用のうしの日の朝ツユをとった(受けた)もんでないと効かん言うての、まだ暗いうちから起きて、クサギナに、ヨモギに、ジュウヤク、カワショウブ、カキドウシ、アザミにキハダの7種、その他はなんぼういれてもええ言いよった。」「夕方風呂を沸かしたら、うちにはいりに来んさい。なんぼう入れとる言うて、自慢をしたりして……キハダの皮を入れたら手ぬぐいが黄色にそまっの……ザミは打ち身の薬になろう」そばできいていた奥さん(72)も加わって「昔は木風呂じゃったろ。半分位水を入れて、草をオシキリやなにかで切って入れて煎じてから、入る時に水を加えてちょうど良いようにして入ったが、顔を洗う時にゃあ、手でどけるようにして洗わんにゃあいけなんだ。3~4日はその湯につかりよりましたが、ここしばらくはせん。今ごろあ、さじいっぱいの入浴剤がありまひょう。」

———山県郡大朝町岩戸で聞き取り 当時77歳

- 「土用にゃあ、クサギナとアセモグサ(カニクサの通り名)の風呂に入りゃあ健康で過ごせる言うていよりました。」

———高田郡吉田町多治比で聞き取り 当時68歳

- 「葉の若いうちに湯がいて食べられる。ワサビを作る畑のそばに植える。早ように葉が出て陰をするじゃろ。」

- 山県郡戸河内町那須で聞き取り 当時79歳
- ・ 「幹の元の虫がええ、3つまでの子供に効く。」
- 山県郡戸河内町押ガ埜で聞き取り 当時79歳
- ・ 「幹の虫はハウジョウと呼ぶ。採ってよう食べておった。」
- 双三郡三和町上滝で聞き取り 当時70歳
- ・ 庄原市峯田地方の民俗学者故山田次三氏は、「クサギナ、ヨモギ、カワショウブ、ニンドーキヅラ（スイカヅラ）、ノガヤ（ワレモツコウ）、オトギリソウ、ホネツギグサ（アカネ）の七種類を土用のうしの日に使う。」と記している。

キブシ *Stachyurus praecox* Sieb. et Zucc.

方言	方言採集地	被採集者年齢
ツイツイ	戸河内町那須	79
トウシミ	戸河内町松原蔵座	80
	加計町月の子	76
	戸河内町猪山	68
トウシミノキ	加計町月の子	76
ヌクデ	(戸河内町横川馬場出身)	56

利用

- ・ なかの芯を抜いて、油火をともし芯にしよつた。
- 戸河内町松原蔵座で聞き取り 当時80歳

その他

- ・ 市内中区の繁華街にある「炉談亭」と呼ぶ小料理店のあかりに油火が灯されている。この芯にキブシのずいが使われており、なるほどと思った。
- ・ 東京の下町出身のある放送関係者によれば、このずいを玩具店などで売っていたと言い、子供のころ買っては口に含んでは少しづつ歯でかみ切り飛ばして遊んでいたのだと教わったことがある。
- ・ 昭和60年ころ鉢植えのハチジョウキブシが園芸店の店頭でよく見られたものであったが、その後いっこうにおめにかからない。鑑賞価値が高いだけにキブシを含めて鉢ものとして季節を代表する花になってくれることを願いたいものである。

ソヨゴ *Ilex pedunculosa* Miq.

方言	方言採集地	被採集者年齢	採集年月日
シバツク	山県郡戸河内町猪山山下	71	平成3年8月23日
フクラシ	三次市向江田	63	
	世羅郡甲山町赤屋	68	
	(比婆郡東城町小奴可出身)		昭和62年3月9日
	神石郡神石町田頭	75	
	山県郡加計町黒峠	62	
	山県郡加計町温井	72	平成3年8月23日

方言	方言採集地	被採集者年齢	採集年月日
フクラシ	山県郡戸河内町猪山下	7 1	平成 3 年 8 月 23 日
	(神石郡三和町父木野出身)	5 6	平成 3 年 11 月 25 日
	安佐北区白木町栢谷	6 9	平成 4 年 1 月 12 日
フクラシバ	安佐南区沼田町阿戸	4 2	平成 3 年 9 月
フクラセ	三次市太田幸町五反田	7 3	平成 3 年 10 月 6 日
フクランドウ	安佐北区白木町大迫	6 5	平成 4 年 1 月 12 日
フクレシバ	山県郡戸河内町那須	7 9	平成 3 年 9 月
	山県郡戸河内町坂根	8 7	平成 3 年 9 月
	山県郡大朝町岩戸	7 7	

利 用

- ・ 「枝のすぐい木はオモチャになりよった。」
 ——山県郡戸河内町那須で平成 3 年 9 月に聞き取り 当時 7 9 歳
- ・ 山林の境界木についての談話「この辺じゃあ、フクレシバが多いの。ヒノキ、ヒバ、モミジも使うが、上の方を切って横に枝を広げとくが…境界の木を植えても隣り同士せる者はせる…じゃが山いうても近くの山は昔じゃあ草を刈って田んぼにいれとったけえ、山ざかえだけ木をたてておろう。どこを見てもようわかりよったが今は見えんようになった。」
 ——山県郡大朝町岩戸で聞き取り 当時 7 7 歳
- ・ 「この辺の山境界は石を充てるところもあるが、アセビ、フクラシが使われよう。吉舎町回りゃあ、フクラシじゃろ、そりょうしらずに頼まれた仕事に行った時に切つての、ぶち怒られたことがある。」
 ——三次市向江田で聞き取り 当時 6 3 歳
- ・ 「境界は誰が行ってもわからんようになってきたが、昔じゃあフクラシ、ネズモチ、ムギメシノキ、モロギをだいたい使いよったです。」
 ——世羅郡甲山町赤屋で聞き取り 当時 6 8 歳
- ・ 正月に実の付いた枝を神棚にあげる。山の境界の木になっている。
 ——比婆郡東城町小奴可出身者から平成 3 年 9 月に聞き取り
- ・ 稲藁架けを作っておられた。「そうじゃの、エンジュ、フクラシ、アセビ、クリ、ジョウボの手頃なもので。つかいようによっちゃあ、10から15年はもとう。」百本ぐらい完成させて満足そうであった。
 ——神石郡神石町田頭で聞き取り 当時 7 5 歳
- ・ 炭の話について。「ええ炭いうとカシ、ナラ、クヌギの順じゃろ上木で。中木でもええのはフクラシじゃろ。そこらじゅうにあるが知っとられるかも…」
 ——山県郡加計町黒峠で聞き取り 当時 6 2 歳

アセビ *Pieris japonica* D. Don

方言	方言採集地	被採集者年齢
アセブ	山県郡戸河内町那須	7 9
	山県郡八千代町南方	7 9
	高田郡千代田町上根	8 7

方 言	方 言 採 集 地	被採集者年齢
ゴマワリ	大竹市栗谷町後原	9 0
ゴマンドウ	山県郡八千代町南方	7 9
ゴマンゾウ	(安佐南区安出身)	5 7
シラミシバ	島根県那賀郡金城町長田	
パチコ	(佐伯郡湯来町砂谷出身)	4 2
パチンコ	大竹市栗谷町	5 5
ベッチ	東広島市高屋町小竹	6 5
ベンベラツク	山県郡芸北町大暮	6 6
ムギバナ	三次市太田幸町五反田	7 3
ムギメシバナ	三次市太田幸町五反田	7 3
ムギノハナ	山県郡戸内町那須	7 9
ムギンバナ	世羅郡世羅町東太田	7 0

その他

- 「この辺じゃあ、アセブいいよったが煎じてその汁をウジムシ退治にいれよった。それはよう効きよった。牛は昔はようシラミがわきよったでひょ。やはり煎じて体をあろうてやりゃあ、よう効いての。牛が喜んで……。ヤギはアセブの葉を食うと死によりましたの。やらんことよの。」

——高田郡千代田町ト根で聞き取り 当時 8 7 歳

- 八坂書房 昭和51年発行 外山三郎著 「草木歳時記」によれば「長崎や長崎から北へ向いてのびる西彼杵半島では、これをシシクワズという。シシクワズのシシはかのシシ、つまり今のシカのことで、シカも食わぬというわけ。

驚いたのは江戸時代、長崎の出島に来ていたツェンペリーは、その著書、「日本植物誌」にアセビの絵を描いて説明し、シシクワズと書いている。長崎の人に聞いて知った名であろう。」

- 祖母は佐伯郡佐伯町玖島出身であるが、ムギメシバナの名で呼んでいた。安佐北区三入で幼少期を過ごした私自身はベチコ、ベッチ、ゴマンゾウ、ゴロマンゾウなどと呼んでいた。花どきともなればこの花を採り歩いては一輪一輪花茎を持ち額に強く当てて、その音を競っていたものであった。その音はベッチの名に相応しいものであったから今だによく覚えている。このころヤギを多い時には三頭も飼っていて草刈りが日課であったが、特に冬場には草がなく竹駕籠いっぱいにするには一苦勞だった。子供心にいろいろな山の木の葉は食べてくれぬものかとベッチを与えたところヤギは横たわり、口から泡をふき出し始めて死ぬるのではないかと心配したのであったが幸いにも元気になってくれてほっとしたこともあった。その時にはじめてヤギに食わずものではないことを知ったのであった。

ナツハゼ *Vaccinium oldhamii* Miq.

方 言	方 言 採 集 地	被採集者年齢
ウマノキンツウ	安佐北区可部町綾が谷	7 4
オンボキズ	大竹市栗谷	5 5
カマスイチゴ	三次市廻神町泉水	7 3

方言	方言採集地	被採集者年齢
カンスイチゴ	三次市廻神町泉水	73
	(比婆郡東城町小奴可出身)	62
シャシャボ	大竹市前飯谷	75
スイバイチゴ	山県郡芸北町大暮	66
ドピン	安佐南区沼田町阿戸	42
ハチマキイチゴ	安佐南区沼田町阿戸	42
	三次市廻神町泉水	73
	三次市太田幸町	73

ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb.

方言	方言採集地	被採集者年齢
キツネシャシャボ	大竹市前飯谷	75
クサカキ	三次市太田幸町五反田	73
サッコウ	安佐南区沼田町阿戸	42
	(佐伯区五日市倉重出身)	81
	(「サッコウ サが付くキツネの半米」)	21
	佐伯郡佐伯町玖島上大谷口	60
シャシャキ	大竹市栗谷後原	90
シラサギ	大竹市歴史研究会発行「小野小史」(平成3年)上木野編より	
	豊田郡本郷町上谷(わだ)	70
チラサキ	山口県玖珂郡美和町向原	75
ヒササギ	山口県玖珂郡美和町板上向原	82

エゴノキ *Styrax japonica* Sieb. et Zucc.

方言	方言採集地	被採集者年齢
チナ	山県郡戸河内町那須	79
	山県郡加計町月の子	76
チナイ	(比婆郡東城町小奴可出身)	62
	高田郡甲田町	88
	庄原市掛田町	65

利用

- ・ オジャミについて。「チナイの実に足袋のコハゼを入れると音がええ、いいよった。」
———庄原市掛田町で聞き取り 当時65歳
- ・ 青虫退治について「チナイの青い実を採って、叩きつぶして汁を水で薄めて青虫退治に使ってあった。」
———高田郡甲田町で聞き取り 当時88歳
- ・ 「カマの柄にする。木が白かる、ねばいし昔は天秤棒に使いよった。オモチャにもなりよった。」
———山県郡戸河内町那須で聞き取り 当時79歳

- ・ 安佐北区三入で育った私自身チナと呼んでいた。夏休みになるやいなや川あそびのなかでもとりわけ魚採りにきょうじていたものであった。そのなかでもこのチナの実を叩きつぶして白っぽい汁を空き缶にためて、水がよどんでいるような場所にながしてはその毒で魚が弱り捕まりやすくなる。おもしろいように捕れていたのである。しかし、すぐに逃がしてやり、弱った魚はヨモギを叩きつぶしては口から汁を注ぎ込む蘇生術をほどこしていたものであった。今になってみれば殺生なことをしていた幼い日々を思い出すのである。
- ・ 安佐北区安佐町久地にある安佐自然休養村内の広島市園芸指導所安佐分場に開設当初から5年間勤務したのであるが、花木見本園にこのエゴノキを植えてみた。団体案内をしていると必ずといってよいほどにラベルをみて冗談がとびだす「…にこの木を送ろうか」などといったぐあいである。「わしらんところはチナ言うで」などさまざまな呼び名も聞ける木でもある。
- ・ すでに十数年前のむかしになるのであるが、中国山地谷間の集落を走りまわり古老から多くの話題を聞き歩きしての帰り道でもあった。戸河内町小坂から松原に向かう自動車道はやっとトラックが通れるくらいの道幅で、しかもくねくね曲がっていて普通車で通過するにもよほどの注意を払う必要があったところに大型トラックが無理に進入しカーブが曲がりきれずに、しかも脱輪して立ち往生しているところの後続車となった。バックして八幡に回って帰るにしてもかなりの遠回りになるから、なにがなんでも進める必要があり手持ちのスコップで道を広げたり、ノコで大きい枝を切ったり、ジャッキで車輪を上げるなりの大騒ぎとなったが、この時にマルミエゴノキの大木に出会い驚いたものであった。今は裏街道となり人の目に触れることもなくひっそり生き長らえていることであろうと思い出すのである。

サルナシ *Actinidia arguta* (Sieb. et Zucc.) Planch. ex Miq.

方言	方言採集地	被採集者年齢	採集年月日
コクボ	(比婆郡東城町小奴可出身)	62	3平成3年9月
シラクチ	山県郡戸河内町松原蔵座	80	3平成3年8月16日
シラクチカズラ	山県郡芸北町樽床	72	

利用その他

- ・ 「深い谷しかないが一番うまい、ヘソを取って食わんと舌がいとくなる。秋おそうになったらやわらこうなろう。よう採って食べよった。」
 ——比婆郡東城町小奴可出身者から平成3年9月に聞き取り 当時62歳
- ・ 「秋になったら汁が下りる。切ってビンにためて土の中に埋めておき、しばらくたって砂糖を加えて飲むとうまいもんじゃつた。」
 ——山県郡戸河内町松原蔵座で平成3年8月16日に聞き取り 当時80歳
- ・ キネの話題を追っていたおり「木が堅いウツメ(ヤマボウシ)がキネにええ言いますよ。それにシラクチカズラがね、この木はツルでしょ、いっぱいずがあって水分を含んでくれるのでモチをつく時に水をつけんてつけましよう。この辺じゃあキネじゃあなくて、キノと呼んでますよ。」 (めばえに記録)
 ——山県郡芸北町樽床で聞き取り 当時72歳
- ・ 安佐北区安佐町久地の高山の川辺にこのサルナシが自生している。毎年よく結実しており初冬のころ柔らかくなったところを見計らい出かけては季節の味を楽しんでいる。食べられる木の実のなかでも王者格で、果物として知られる仲間のキューイフルーツよりか遙かにうまいものである。

- ・ コクボの方言について倉田悟氏は「植物と民俗」地球社（昭和44年）に越中五箇山桂と収録している。

ネムノキ *Albizia julibrissin* Durazz.

方言	方言採集地	被採集者年齢	採集年月日
コウカ	山県郡戸内町押ガ埜	7 9	
	山県郡戸内町寺領	8 8	
	山県郡戸内町那須	8 5	
	山県郡戸内町猪山	6 8	
	安佐北区可部町綾が谷	6 2	
コウカイ	(神石郡三和町父木野出身)	5 6	平成 3 年11月25日
コウカノキ	双三郡三和町上滝	7 0	

利用その他

- ・ 倉田 悟著 「植物と文学の旅」(地球社1976)によると
「ネムノキは里人の実生活にいろいろと利用されてきた。葉は牛の大好物で、ウシノコメ(岡山, 広島, 隠岐), ウシノモチ(岡山), ウシノソウメン(鳥取), ウシノヤッコメ(兵庫)などと呼ばれるゆえんである。東北地方ではネムノキをマッコまたはマッコノキと呼んでいる村里も多いが, これは葉を干して粉にし, お盆に抹香として仏前にたくからである。また, ネムノキの葉の煎汁は洗髪用となる。鹿児島県桜島の古里にはネムノキにヨメジョノキの名があるが, 嫁女といったのは洗髪利用に関係があるのかも知れない。」
- ・ 「葉を煎じて頭洗いにつかひよった。」
——山県郡戸内町猪山で聞き取り 当時 6 8 歳
- ・ 「この花が咲けば水に入っても風邪を引かんいいよった。」
——山県郡戸内町押ガ埜で聞き取り 当時 7 9 歳
- ・ 「コウカはかつぎ棒にしょった。そりゃあ軽うて折れにくい。オイコにも。そこら中にあるし。」
——安佐北区可部町綾が谷で聞き取り 当時 6 2 歳

コシアブラ *Acanthopanax sciadophylloides* Fr. et Sav.

方言	方言採集地	被採集者年齢
シロキ	山県郡戸内町松原蔵座	8 0
	山県郡戸内町平見谷	8 0
	山県郡戸内町平見谷	7 6
シロギ	(比婆郡東城町小奴可出身)	6 2
	三次市廻神町泉水	7 3
ボカ	山県郡戸内町那須	7 9
	(山県郡戸内町横川馬場出身)	5 6
ボカノキ	山県郡戸内町松原蔵座	8 0

利 用

- ・ 「経木にしょった。帽子にもなっていた。」

- 三次市廻神町泉水で聞き取り 当時73歳
- ・ 「注文がようあって伐ってよう出しよった。」
- 山県郡戸河内町那須で聞き取り 当時79歳
- ・ 「春先の芽は食べられる。」
- 山県郡戸河内町松原蔵座で聞き取り 当時80歳
- ・ 「昔からあの琴平さんのことをいうての、下駄はシロキに決まるとるよの。ホオは伐って材で売りよったが…」
- 山県郡戸河内町平見谷で聞き取り 当時80歳
- ・ 「この土地は昔から、ホウノキの下駄は履いちゃあいけんいいますでそりゃあ、滝の琴平さんの神さんがのホウノキで造られているからじゃいうての、もったいないし……だからこの辺じゃあシロキの下駄を作って履きよったものです…」
- 山県郡戸河内町平見谷で聞き取り 当時76歳
- ・ 味噌や肉、豆腐を買うと決まったように経木で包装されていたものであった。結わえひもも経木であったがいつの日か石油製の経木もどきの紙に変わった。ほんものの経木を知っているのはもう古い世代なのだろうか。
- 明治43年生まれ之母は大正のおわりころに経木帽子の組編みをよくしていたという。なかば女学生の間でこの組編みは流行していて夜なべして何十メートルと完成させてはこずかいにしていたという。

アカメガシワ *Mallotus japonicus* Muell.

方 言	方 言 採 集 地	被採集者年齢
サイバ	尾道市向東町歌	80
サイバノキ	安芸郡倉橋町鳴滝	71
ヒトツバ	山県郡戸河内町那須	79
	山県郡戸河内町坂根	87

利 用

- ・ 「やおすぎて薪にするくらい」
- 山県郡戸河内町那須で聞き取り 当時79歳
- ・ 「こりゃあ、サイバです、この辺りじゃあ、団子をつつむ葉に使うくらいしか用はありません。」
- 尾道市向東町歌で聞き取り 当時80歳
- ・ 「サイバノキいうが、シバモチに使いよったです。モチについたへげ残りは毒じゃあなあいうて食べよったが、へげにくうて茶や湯の中につけて、ゆっくりへぎよりましたで……」
- 安芸郡倉橋町鳴滝で聞き取り 当時71歳
- ・ 一名ゴサイバともいうが、これはむかしこの木の葉に食物をのせたことにより御菜葉または五菜葉とよばれるようになった。菜盛葉ともいう。

タムシバ *Magnolia salicifolia* (Sieb. et Zucc.) Maxim.

- ・ 広島地方の方言としては、「コボシイ」と言う名を、世羅郡甲山町小寺で当時87歳の古老から採集できた。この方は、天秤に使う棒について次のように語られた。「コボシイ言う木を削って使うの。ねばっこうありますけん」

- ・ 和名の由来はカムシバ，すなわち歯で噛むと甘くて独特のにおりが良いところから変化したものと言われる。
- ・ 「この花が咲きはじめるとラ，すなわちアサの種をまく」
「この花が咲きはじめると昼寝が出来る」
———安佐北区安佐町久地三国で聞き取り 当時85歳
- ・ 昭和59年に中区の明治橋の東詰めに比較的大きなタムシバが植栽されて，その年にみごとに満開となりひとの目を引きつけたものであったが，ラベルにコブシとありがっかりした。
- ・ 昭和60年の春に南区宇品御幸2丁目の広島市郷土資料館北側の公園内に2本タムシバが植えられた。その年に満開であったが，花が終わるところヒヨドリが花を食べに10数羽群がり，追っても追ってもすぐに群がった。とうとう全部食べ尽くしたかに思えたが，秋にわずか一つの実が実り人間さまの努力のかいもちょっぴりあったのかと喜んだ。
- ・ みよし風土記の丘のサマースクールの指導を頼まれて場内の植物を解説しながら歩いた時にこのタムシバの木を観察したが，良く種が実っており方言コブシの由来に多くは感動されたようで実物あつての紹介の大切さを身にしみて感じた。

タラノキ *Aralia elata* Seemann

方言	方言採集地	被採集者年齢	採集年月日
オニギ	御調郡向島町津部田	80	
オニ一ギ	大竹市木野町中津原 (大竹市防鹿出身)	84 69	平成3年12月29日
オニグイ	愛媛県越智郡大三島町宮浦 山口県大島郡東和町和田 山口県大島郡東和町内入 愛媛県北条市にて小沢康甫氏が 採集	60 71 76	
オニノイギ	小瀬川上流弥栄峡付近 大竹市玖波	69	
オニノボウ	岩国市通津町本呂尾 岩国市通津町畑 山口県玖珂郡美和町向原	62 51 82	平成3年12月29日 平成3年12月29日 平成3年12月30日
サルイギ	大竹市木野町中津原	84	
タラノメ	竹原市宗越町	80	平成3年12月31日
ヨメタタキ	東広島市志和町米山 東広島市志和町杉坂	79 77	

利 用

- ・ 弥栄峡の民俗（名勝弥栄峡総合学術調査団1979）によると、「節分（年の夜）に神棚や戸口にオニノイギをかざる。」とある。
- ・ 「もうこの辺じゃいっそう見られんが，昔は節分の日には山からイガ（トゲ）のあるオニノイギを採ってきて，10cmぐらいに切つての，3本ほど紐で結わえて玄関先の軒下にぶらさげておった。」「何かの魔除けじゃろうがの…」

———大竹市玖波で聞き取り 当時69歳

(めばえに記録)

- ・ 節分についての話題になって「年の夜(節分)には、トベラとオニグイを縛り付けて、家の出入口に立てかけて置きましたよ。また豆の中にトベラの葉を入れて、炒り豆にして神様に向けましたが、今頃はせんです…」

———山口県大島郡東和町和田で聞き取り 当時71歳

- ・ 節分の行事についての話を伺っていると「トベラの葉と豆を炒ると、葉がパチパチと大きい音をたてる。それに出入口に立てかけたオニグイのトゲを見て、鬼がこの家は恐ろしい家じゃ思って入らんけえ、いうてしておったで。トベラはくさいし…」

———山口県大島郡東和町内入で聞き取り 当時76歳

- ・ 節分の話を伺っているうち「家の入口にやっとなるが…」と腰をあげて案内してもらった。タラノキの先を10cmぐらいに切って2つに割り、×字に重ねた間にトベラの葉を一枚はさんで中心をクギで打ちつけてあった。「毎年しよるが…」と4年分がみられたのであった。

———安芸郡倉橋町鹿島中家之元で聞き取り 当時87歳

- ・ 煎じて飲むと石下し、体毒下しに効く

———岩国市通津町本呂尾で平成3年12月29日に聞き取り 当時62歳

- ・ 「イリコをつけて玄關にたてかけよった。節分の日に…トゲがあつてオニが恐れる。」

———大竹市防鹿出身者から平成3年12月29日に聞き取り 当時69歳

- ・ 「これの芽をみそ煮にするとうまい」

———竹原市宗越町で平成3年12月31日に聞き取り 当時80歳

- ・ このタラノキの紅葉は素晴らしい

その他

- ・ 昭和60年ころ一時的なタラノキのブームがあった。真冬に母は園芸店で高さ30cm内外のビニールポット苗9本を買い込んで庭植えたのであった。その目的は新芽をテンブラにして食べよとの試み。自家生産をめざしたものであった。その年の春に5本の新芽を収穫し食卓に登場させていろいろと話題に花を咲かせたのであるが、根がしっかり張っていなかったこともあり新芽を収穫した5本全部枯らしてしまった。新芽を採らなかつた4本は順調に育ち翌春に収穫ができてたいそう母は喜んでいたのであったが、2番芽も全部とり食卓に登場させたこともあり、しだいに樹勢を失い、加えて害虫の追い打ちにより枯れてしまった。2番芽の収穫を半分程度にしておけばと悔いを残したようであった。
- ・ すでに20余年前のことであるが伊豆諸島産トゲナシタラノキを入手して育てたことがあるが、次年には小さい刺を数本確認し、さらに翌年には刺が多く確認できたのであった。いったいトゲナシタラノキの正体はどんな物であろうか? 八丈島に多いとされているもののいわゆるメンダラ系で刺の少ないタラノキは時々見かけるのである。正真正銘のトゲナシタラノキをどこかでみたいものと思っている。
- ・ 広島市園芸指導所安佐分場に勤務していたおり、斑入りの花木の収集に力を入れていたこともあり、知人の協力を随分おおいだものである。このうちのひとつに見事なふく輪で白のあざやかなタラノキがある。後の園芸指導所の所長になられた井内一樹氏が佐伯区内の山で発見して届けてくれたもので現在も分場内で元気に育っているのであるが、これほどの価値あるフクリンタラノキが絶えることなく保存し続けてもらいたいものである。
- ・ 「原爆に直接あわれ小便が出なくて苦しんだがタラノキの皮を煎じて飲んでからはそりゃあ楽になった。極端にいうとタゴに一日に一杯ほども出たの、こりょう飲まだったらとっくに死んでおつたろ」とは元太

田川の川船の船頭をやっておられた安佐北区可部町在住の方の話であった。

ザイフリボク *Amelanchier asiatica* Endl.

- ・ ジイナブリと言う方言を神石郡三和町階見で、当時65歳の方から採集できた。キネの話題を追っていたら「ジイナブリがキネにええの、割ろうと思うても割れんし…」とのことであったが幸いにも山林の手入れの最中であり、探してもらった。「やや、ねじれとろう、これよの、この太い木をの…」とのことであった。

ヤブツバキ *Camellia japonica* L. var. *japonica*

和名の由来

- ・ 「植物名の由来」(中村浩1980)によればツバキの名の由来については、「現在二つの説がある。その一つは、これは艶葉木の転訛したもので、葉がつやつやしている木の意であるといい、一方は、ツバキは葉が厚いから厚葉木といったものがツバキになったという説である。わたしは、これらの説とは異なる解釈をしている。わたしは、ツバキは「鏝木」ではないかと思っている。椿の木の下にたくさん落下しているいわゆる落ち椿を見ていると、椿の花は、中央が筒抜けていて、ちょうど刀の鏝のように見えるからである。……」との説をあげている。

利用とあそび

- ・ 佐伯区倉重の方にキネの話題を聞いてみたら「キネは大体ツバキかサクラで、わしんところはツバキじゃが…」
- ・ 安佐北区安佐町久地の方にキネの材料について聞いてみたら「キネはツバキの四つ割りを使うものよの、今は機械にしたけえ使うとらんがととる(保存している)よ」
- ・ 落ちた花を集めて首飾りや冠を作っておしゃれ遊びをよく妹らがやっていた。花びらは手でよくもむと泡が出るころから石鹸遊びの材料となっていた。そしてよく咲ききった花を花首から採っては甘い汁を吸っていたものであった。

イヌツゲ *Ilex crenata* Thunb. ex Murray var. *crenata*

方言	方言採集地	被採集者年齢	採集年月日
ネジリモチ	安佐北区白木町大迫	65	平成4年1月12日
ネズミギ	豊田郡本郷町上谷	70	
ネズミモチ	山県郡戸河内町松原蔵座	80	
	山県郡加計町月の子	76	
	(山県郡戸河内町横川馬場出身)	56	
	山県郡戸河内町柴木	80	
	安佐北区白木町栢谷	69	平成4年1月12日
ネズモチ	山県郡芸北町木束原	78	
	高田郡八千代町畑	85	
ネズキチ	山県郡芸北町八幡	85	
ネズリモチ	安佐北区白木町大迫	65	平成4年1月12日
ネンドウ	山口県玖珂郡錦町	89	
	佐伯郡佐伯町玖島上大谷口	60	
	佐伯郡吉和村熊崎	83	
	大竹市栗谷後原	90	
	山県郡戸河内町押が峠	79	
モチノキ	安芸郡倉橋町宇和木	75	

利用その他

- ・ 牛の鼻輪について「ネズキチじゃろの、火にあぶりゃあ柔らこうなっておれんこうに曲がろう。雪の上を歩く雪輪もの」
———山県郡芸北町八幡で聞き取り 当時85歳
- ・ ゲンノウの柄について「この辺じゃあモチノキと呼んどるが、そりゃあねぼうてええ」
———安芸郡倉橋町宇和木で聞き取り 当時75歳
- ・ 「ある村人が、ネンドウの木で弓をこしらえた。ネンドウは昔、高い木じゃったそうで、それに登った村人はてっぺんから矢を天の神様に向けて放ったんだそうな、神様は、それはきつうにおこられて、その村人はすぐに死んでもうたそうな。木はそれ以来、神様に申し訳がたたんと天に向かって大きく伸びんようになったんだそうじゃ」と教わった。松前さんはかわいそうな木ですと前置きしての話であった。
———山口県玖珂郡錦町で聞き取り 当時89歳
- ・ 倉出 悟著「植物と民俗」地球社発行（昭和44年）なかの周防滑国有林の植物名方言のなかのヒイラギの項に「……両国本草の周防の部に出ているネンドウという方言名と、岩崎権園の本草図譜に周防の方言名として揚げられているピンカズが現在、山口県のどこかに残存していないだろうか。皆様のご調査を期待したい。」とある。
- ・ イヌツゲは生木で燃えやすい木でもある。かつて東京大学理学部附属植物園に勤めていたおり、大温室前のモミジ並木の下にイヌツゲのグリーンベルトが長く続いている。現在ニュートンのリンゴの木が植えられている前付近から、タバコの投げ捨てからバリバリと大きな音をたてて燃えたのである。幸いにも発見が早くて10mぐらい焼けただけで済んだものの、この時にはじめて燃えやすい木であることを知ったのであった。
この木が燃えやすいことから、世羅郡世羅町の老婦から、煙突掃除の時、この木を燃えさかっている時に火に加えると火力が増して瞬間的にすすをきれいに取り去ることが出来ると聞いてなるほどと思ったのである。

ムクロジ *Spiandus mukurossi* Gaertn.

方 言	方 言 採 集 地	被採集者年齢
ジュゴノキ	(東広島市志和西出身)	64
モクロ	(愛媛県越智郡菊間町長坂出身)	80

利用その他

- ・ 「モクロいいよったの。実が羽根の玉になりよった。」と記憶をたどり「実が黒いけえ、モクロと呼ぶのかも知れん。」
———愛媛県越智郡菊間町長坂出身者（当時80歳）から聞き取り
- ・ 「羽根つきの玉になるが、昔からうちの庭にあって、秋に実を捨てはたたいて水で薄めてシャボン玉遊びをしておったの。親らはムクロジとは言わずにジュゴノキじゃいいよった。その意味は知らんが…。古くは石鹼の代わりに使っていたと聞いておったが、わたしの代は石鹼も出回っておって使ったことはないが……」
———東広島市志和西出身者（当時64歳）から聞き取り
- ・ 島根県邑智郡旭町市木の市木神社の社内に島根県指定の天然記念物「ムクロジ」の巨木に出会った。

この周辺の史跡めぐりに数年前に参加したおりであるが社の入口の同町教育委員会が建てた解説板を見ておどろいた「…このむくろう樹は八百年以上を経ている。古来じゅずがこの種子から作られた…」とあった。なにがともあれと石段を足早に登り社殿の左に神木として植えられているムクロジの大木を見た、目通り4 m以上にもなろうか、私自身の今まで見てきたどれよりも大きいだけに樹齢こそ疑問を持ったが驚いたのである。ちょうど秋たけなわで初冬すら感じさせられるほどの強風にあおられてパラパラと果実が落ちている最中であった。神職もちょうど掃除に懸命だったこともあり同社の齋ヨリ子さん(44)にこの木についていろいろと伺ったら「子供のころ、この実を拾って小川でよく洗って炒って食べていましたよ。味は忘れましたが…」と言い、さらに「洗う時にはよく泡が出てから、石鹸じゃ言うて遊んでいましたが、後になって石鹸の代わりに使っていたと聞いてなるほどと思ったことがありますよ。たくさん拾っていきなさいよ。」という。さらに社業内を歩いているとやや若木であるがもう一本見ることが出来た。この史跡めぐりを案内していただいたのは市木の老人クラブの会長でもある徳川亀次郎さん(78)であった。「ムクロウジュの実の玉は、糸車の管巻きの心棒に穴をあけて通しついていたよ」と徳川さんは加えて頂いた。

- ・ 山県郡加計町加計の長尾神社の神木はムクロジ
- ・ 高知市介良の介良神社を、近くに住む高知県立牧野植物園に勤める稲垣典年さん(51)に案内してもらった。この神社の神木もムクロジであり、この地方ではヂクと呼んでいるとも教わった。
- ・ 高知県高岡郡多ノ郷村の伊気神社の神木のムクロジの巨木は有名で是非見物したいと思っているが、そのチャンスはまだない。

カクレミノ *Dendropanax trifidus* Makino

- ・ イモウキ、イモギと言う方言を教えてくれたのは徳山市裕島川端の当時73歳と72歳のお二人であった。そのうちの一人は、「うちの方ではイモウキ、イモキとよんでます。言われは知りませんが、カシワモチを作る時に葉を使いますよ。」と言い、別の方が「そうよ、つかうてえ。」との問答しながらの話だった。
- ・ 昭和50年代にはオフィスなどに観賞用に鉢が多く飾られるようになって、広島市内でもこの貸し鉢業者がつつぎと誕生した。品薄とあってからかこのカクレミノも対象となったのである。日陰にめっぽう強く、しかも乾燥にも強く耐えるところから一時的に人気を博したのであろう。しかし熱帯・亜熱帯産の同科のより観賞的なアラリアやフルクレアなどを含めて、クワ科のフィッカス属のベンジャミンなどの流行ですっかり影が薄らいでいるようだ。

シラカシ *Quercus myrsinaefolia* Bl.

- ・ 安佐北区安佐町久地の当時66歳の方から、カタギと言う方言を教わった。
テンビンボウ(天秤棒)について「そうよのう、たいがいキリかカタギじゃろ」

ザクロ *Punica granatum* L.

- ・ ザクロの方言は県内では特に聞くことはないが、用途やいろいろな言い伝えやことわざなどを聞くことができるのである。
- ・ 「ザクロは家の上(家屋に接近したうえ)に植えりゃあ、病人がたえない」
———高田郡吉田町多治比で1982年に聞き取り 当時80歳
- ・ 「ザクロはそりゃあ、ひどうに(すぐれているの意)効くの、根を煎じて飲むと虫下しにの」

- 安佐北区安佐町久地で1983年に聞き取り 当時65歳
- ・ 「ザクロは割れるいうて植えちゃあいけん言われる方がいます。この辺では十二指腸にはええらしい言うてですが…」
- 庄原市掛田町で1983年に聞き取り 当時65歳
- ・ 「ザクロの花は千咲く実は一いつ 言うてえのこの辺じゃあ、人に例えての」
- 豊田郡安芸津町市之畑で1983年に聞き取り 当時78歳
- ・ 「花は千咲く ザクロの実は一いつ 九(く)百九(く)十九はあざの花 歌に歌われとるくらい、えっと実が止まらんというの」
- 豊田郡安芸津町大田で1983年に聞き取り 当時70歳
- ・ 庄原市峯田町の故山田次三氏の古い記録では
「花になりたい、木石溜の花に花が千咲き実が一いつ」の小唄を記録

ユズ *Citrus junos Sieb. ex Tanaka*

- ・ 「上から実が採れるように、石垣のそばに植えりゃあええいうの、大きゅうなりゃあトゲもあろう。登れんけえの、昔の人はようまくそう(おもしろい)いいよったものよの」
- 府中市河佐で1983年に聞き取り 当時80歳
- ・ 「すいたおなごがおりゃあ、ユズの木でも逆さに登る。」
- 賀茂郡河内町宇山で1983年3月に聞き取り 当時73歳
- ・ 「女の子が生まれりゃあ、ユズの種をまけえ、娘が嫁に行くころなりはじめ、その種を食べりゃあ、お産が楽じゃいうとります。」
- 豊田郡安芸津町大田で1983年4月に聞き取り 当時70歳
- ・ 「植えたもんが死なんにゃあならんいうがの、最近では接ぎ木したもんが出とってすぐなる。近くに植えた家もあるが……」
- 佐伯郡で1983年8月に聞き取り 当時81歳
- ・ 「あれは古い家でないとないけえね、植えた者から3代先でないとならんいうが、そうでもないらしいですの、よう若木でもならしといてですけえ」
- 安佐北区安佐町久地で聞き取り 当時65歳
- ・ 「自分が植えても自分じゃあ実がとれんいいますで、なかなか成長の遅い意味なんじゃろ」
- 島根県那賀郡旭町市木で聞き取り 当時64歳
- ・ 「桃栗3年、柿8年 柚子の大馬鹿18年」「ユズのみどり色のをコウトウいうがどうしてだろうか……」
- 庄原市掛田町で聞き取り 当時65歳
- ・ 「ユズを遅そうから植えると生涯実をみん、今から植えりゃあ、食べて死なりゃあせんいいますで」その話を聞いて主人の軍三さん(78)は「2年前に接ぎ木苗を買って植えたがもうなりましたで」
- 豊田郡安芸津町市之畑で聞き取り 当時69歳
- ・ 「ユズの実をたたいてとると翌年はならんいいますで、この辺じゃあ」
- 東広島市高屋町小竹で聞き取り 当時60歳
- ・ 「植えた人が死なんにゃあなりゃせん。いいよったが最近では若い木でもようなるが…」と不思議がる。
- 豊田郡安芸津町市原で聞き取り 当時77歳
- ・ 「年頃の男は女の人にはれたらユズの木でもさかしの登る、トゲのある木でもかまわずにの……笑い話じゃろうの。」という。

———御調郡御調町前前後で聞き取り 当時 65 歳

ウバメガシ *Quercus phillyraeoides* A. Gray

- ・ 広島県内はほぼバベの名で呼ばれているが、その語源についてはよく分からない。今のところそう答えていた方が無難かも知れない。
- ・ 昭和50年代に入ってから、このウバメガシの段作りが急速に人気を呼んだのであった。昭和52~53年にかけて再々高知市周辺に出かける機会があったが、その市内から室戸に向かう国道すじの月見岩付近の民家の門かぶりに素晴らしいウバメガシを見つけてびっくりしたことがある。私にとってこの樹木のよさにあまり気付かなかっただけに今風にいえばカルチャーショックを正に実感したのであった。それまでのウバメガシの知識といえば小石川植物園の栽培室の裏の塀に沿って列植されていること、この変種であるチリメンガシが園内に植えられていることぐらいだったからである。この高知の旅は室戸へと足をのばしウバメガシの自生もつぶさに観察できたこともあり、私にとって親密な木となったのである。
- ・ 昭和55年に福山市の仙酔島に出かける機会に恵まれたが、この時にもウバメガシの純林に出会って驚いたのであるが、土地の古老は「かつて備長炭になっていたので何度か切っているのでは……」との話を伺ったことを思い出すのである。
- ・ 赤松林が俗にいうマツクイムシの被害により全滅状態の安芸郡倉橋町の最南の鹿呂渡周辺の山にウバメガシの苗が植えられたと聞いたことがあるが、その後元気で育っているのだろうか気にかかることもある。
- ・ 12年ぶりに元の職場でもある広島市植物公園に勤務する事となった平成3年7月に大花壇のそばのウバメガシの生け垣にミノムシが異常発生し、あれよあれよというあいだに丸坊主となった。もっとも気付いてからバケツに一杯は手で取り集めていたのであったが、薬剤の散布を休園日にやろうとしていたのであったがミノムシの脅威を知らなかっただけに職員もがっかりしていた。
- ・ 朝日新聞の平成3年12月17日付の朝刊には「原木不足の備長炭 中国で焼き輸入へ」とのみだしてニュースとして取り上げている。この記事の内容は「原木のウバメガシが不足しているうえ、炭焼きの後継者難で生産に影がさしている最高級品質の紀州備長炭。グルメ志向を反映してひっぱりだこの需要にこたえようと、産地の和歌山県のしにせが、ウバメガシの豊富に群生する中国・福建省で備長炭を生産することにし、窯づくりと技術指導のためにベテランの炭焼き職人二人を現地に派遣した。来春には一中国備長炭一で売り出す。」とある。ウバメガシの過伐によっていわば材料が不足とあらば外国にたより、そこでまた生態系をみだすといったことが心配される。

ヤツデ *Fatsia japonica* Decne et Planch.

- ・ 朝鮮の人はこの葉柄を強壯剤として使っていたようである。焼酎に漬けてのまれていたとも聞く。
- ・ 安佐北区久地の当時65歳の方は、「戦前広島市の繁華街を歩いて、カフェイン店の前に鉢植えのヤツデを見て、街にはみどりもないし、ハッ手すなわち末広がりに通ずるところから縁起を担いで店先に置いているのだと感じた」という。
- ・ 明治31年生まれの方は、建物を建てる時決まったようにヤツデを玄関先に植えたのであった。その名残は父の所有して現在私が住んでいるアパートの前にも、今は空き家になっている三入の家の玄関先にも元気で育っている。幼いころテングノウチワと呼んでいたが、どんないわれがあったかは今になってみれば父に聞いておけばよかったのと思うのである。

エノキ *Celtis sinensis* Pers. var. *japonica* (Planch.) Nakai

和名の由来

- ・ 清水 清著 「植物の名前小事典」誠文堂新光社 昭和53年発行
「語源は不明。和字に「榎」を用いているのは、暑い夏に樹のかげが好まれるので、木に夏の字をつけたのだらう」
- ・ エノキの名の由来についてはいろいろな説がある。整理してみると
 1. よく枝を出す木の意から 肥えの木 枝の木 の略とする説
 2. 生木でもよく燃えるところから 燃えの木 だとする説
 3. ねばい枝を柄物に使う 柄の木 だとする説
 4. 吉(え)の木 すなわち災いをすくうからだとする説
 5. 祟り(たたり)の木 すなわち神が宿るタタエノキの略とする説
 最後の説は植物学者の故前川文夫博士の説であり、今日有力視してよいものと思われる。
- ・ 私の名字からしてこの木に特別に関心をいただいていることだろうとよく聞かれるのである。
- ・ 昭和43年に千葉県成田市に建設が決まった空港建設の予定地内にある江戸時代からの馬追い遺跡の調査に携わったことがある。聞きなれない遺跡名であるが馬を放し飼いにし、必要な時にこの土塁に囲まれた造築物の中に追い込んで捕まえる施設である。この土塁上にエノキの大木がうっそうと繁っていたのである。周辺は緑陰樹がない広大な野原であったから、暑い夏には木陰を求めて馬が集まっていたという伝承が良く聞けたのであった。和字の意がよく理解できるのであった。

利用その他

- ・ 「エノキはねばい木だし、割けんの。ウシ・ウマの鞍にするがの」
———賀茂郡大和町椋梨で1983年2月12日に聞き取り 当時75歳
- ・ 「比婆郡峰田村小唄集」の当家の背戸の項に、「これのお背戸にゃ、三叉榎の木 榎の実成らいで 金がなる」
———山田次三氏の記録
- ・ 「エノキはケヤと同じように寺を作る時の材に使うの、わりあい木数の少ないものです」
———山県郡豊平町戸谷で1983年3月5日に聞き取り 当時90歳
- ・ 「この葉で漆器を磨くと特有の臭いもとる。女性の陰部の臭いどめに使われていた。」
———庄原市掛田町で聞き取り 当時67歳
- ・ 「エノキの実は竹鉄砲の玉にしようた。」
———島根県隠岐島出身者から聞き取り 当時65歳
- ・ 「材はケヤほどでない……タネ(菌)を植えてエノキダケを作ろう。実を拾うて食べようた。種といっしょに食べるとちょっとこうばしい。」
———甲奴郡上下町松崎で聞き取り 当時69歳
- ・ 「大正7年の大水で流れたが、空鞆橋の西側の光広木材店(現光広ビル)の下は昔はえのき浜いうて大きいエノキがあった。センバを川船に積んで行き、よう下ろしようたがエノキの下で休んだり、弁当にしておった。」
———山県郡加計町船場で聞き取り 当時93歳
- ・ 「うちの裏にエノミ成らず 金が成る一言う唄がある。どういう意味じゃろか。」「芽があんまりはように出んおりは、飢饉があるいうて年寄りはいよいよ。」

——御調郡御調町前前後で1983年2月6日に聞き取り 当時65歳

- ・ 「雑木で、ためにゃあならん木じゃが、マナイタにゃあええ、やおいけえ包丁がいたまん」

——世羅郡甲山町小寺で1983年2月6日に聞き取り 当時86歳

呉市郷原の「飢饉を救ったエノキ」は有名であったが元気だろうか。若い芽を食べ空腹をいやした時代がすでに去って言い伝えとなっているものの、こうした伝承こそ後世に伝えておきたいものである。

カキ *Diospyros kaki* Thunb. ex Murray

- ・ 安佐北区安佐町久地三国の広島市園芸指導所安佐分場の近くにある竹藪のそばに、今になってみれば珍しくなってしまったボンギネリが健在であった。分場に勤務していた5年間お盆すぎになると毎年のようにこのキネリを枝ごと持って来て下さっていたから、その味は忘れられないのである。
- ・ 三入に住んでいた時代には、カキの木が3本あった。一本は甘い柿で、他は吊るしガキやあわしガキ、ずくしガキ用であった。多い時には20連を100ぐらい吊るしガキを作っていたし、風呂湯にバケツを用いてのあわしガキも2~3杯は作っていた。また、ずくしガキはスクモのなかに入れて冬中食べていたのであるから、いかに多くの収穫があったか想像がつくであろう。
- ・ 吊るしガキを作る時の皮は良く乾燥させてから保存し、子供たちのおやつとなっていたのである。学校から帰ると汁椀に一杯分がおやつであり、当時としてはあまり甘いものではなくてむしろ豪華なおやつであったのである。
- ・ ずくしガキは大きなブリキカンの底にスクモ（粃殻）を薄く敷き入れてずくしガキを並べてはスクモを敷いて何段も蓄えていた。しかし、このズクシは子供たちにとってはめったに口にすることはなかった。肺病や風邪のくすりになるために、なかば常備薬の扱いであったからである。よほどの風邪をひき熱が出ないかぎりありつけないから、風邪にかかるとむしろズクシが食べられるので楽しみであったのである。よくうれているズクシはなぜか きんかん と呼んでいたものであった。てっぺんから薄く皮をほんの少し剥ぎそこから吸い込むようにしてたべていたのであった。
- ・ 以下に「めばえ」浜本工芸社内報 カキ（上） 榎本取材記事を要約する。年齢はいづれも当時

留守もりのカキ

カキの実を一つ二つ残す事が昔からよく行われているが、と話を向けてみると山県郡豊平町山田の新井ハルヨさん（84）は「このとうりに次の年も成れよ言うて、留守のもりをしてもらうんよ。年寄り全部採ったらいけん言うて嫌いよった。」という。同郡加計町牧原の佐川 彰さん（93）は「家守りじゃ言うての。毎年成ってもらわんにゃあいけん、迷信じゃろうがよう残しよった。ヨサガキは渋いカキじゃが毎年よう成る。甘ガキのキネリは間一年を置くの。」さらに続け「春に風がよう吹く年は豊作で、霜がおそうまで降りる年は不作で…」と教わった。「こころはあ、種残し言うての。わしらは今でもやることにしておる。」とは干し柿の産地でもある御調郡御調町前前後の昇高亀一さん（65）。山県郡加計町安野の岩崎 勇さん（72）からも「まあ最後にゃあカラスの餌よの、留守番ガキは…」と聞いた。ひとつでも多くの収穫を願う気持ちから生まれた願いはしだいに忘れかけているように思えたのである。

成り木攻め

私が勤めていた安佐北区安佐町久地三国の安佐自然休養村内の広島市園芸指導所安佐分場入口の前の久西宅の庭に西条柿の大木が見られる。このお宅の久西イソノさん(85)は私の知恵袋でもあり再々たずねては植物の用途を教えてもらっていたのであるが、カキの木にかなり新しい傷が入っているのを聞いてみたら「毎年モチの日にチョウノをうってモチをくわしまさあ」とのことだったので、1月7日のモチの日を待ってうかがった。「ナラヌカ、ナラヌカ、ナラニャーキルゾ」とチョウノで幹に何度もうって傷をいれてから「ナリマス、ナリマス」いいながらモチを傷ぐちに付けておられた。その秋には大豊作でこれぞ素晴らしい技術だと感激したものであった。また、三次市酒屋町門田の清政一二三(85)からは、「そうよの、正月のモチの日に家の者と二人連ろうて行つての。片方がナルカ、ナランカ、ナラニャアキツヤルゾいうてチョウノをいれての。もう片方がナルケエ、コラエテクレエいうてのそれからモチを傷口に塗っていました。」との話だった。このことを先述の佐川さんに持ちかけたら「わしのおじいさんがようやっていたが、今頃あやりよる人はおらん。」と首をふった。

クチナシ *Gardenia jasminoides* Ellis var. *jasminoides*

- ・ 山の境の木について聞くと「昔はクチナシを使つとる。なかなか枯れない木」
———岩国市通津町本呂尾で平成3年12月29日に聞き取り 当時62歳

ネジキ *Lyonia ovalifolia* Drude var. *elliptica* Hand.-Mazz.

方言	方言採集地	採集年月日
カソウシ	安佐北区白木町栃谷	平成4年1月12日
サルスベリ	山口県玖珂郡美和町向原 「サルがこの木に登りよって、 鼻をついてその血が残った。」 山口県玖珂郡美和町向原 「サルがすべる。」	平成3年12月30日 平成3年12月30日
	安佐北区白木町大迫	平成4年1月12日
ボウサンノケツツキ	安佐北区白木町栃谷	平成4年1月12日

ビナンカズラ *Kadura japonica* (Thunb.) Dunal

方言	方言採集地	被採集者年齢	採集年月日
カズラトロロ	安佐北区白木町小越	76	平成4年1月1日
トロロ	山口県玖珂郡美和町向原	75	平成3年12月30日
ヤマトロロ	山口県玖珂郡美和町向原	82	平成3年12月30日

利 用

- ・ 「本物のトロロ(トロロアオイ)と混ぜて使ひよつた。本物のトロロは腐る、ぬくうになつたら」
———山口県玖珂郡美和町向原で平成3年12月30日に聞き取り 当時82歳
- ・ 「ねばいけえ、昔は紙漉きの糊にしよつた。」
———山口県玖珂郡美和町向原で平成3年12月30日に聞き取り 当時75歳

イヌビワ *Ficus erecta* Thubb.

- ・ ヤマトウガキと言う方言名を豊田郡安浦町沖の浜の当時84歳の方から教わった。

ネコヤナギ *Salix gracilistyla* Miq.

方 言	方 言 採 集 地	被採集者年齢
フジネコ	山県郡戸河内町那須	7 9
トートコ	(安佐北区三入横川出身) 「トートコ トートコ コーウメ」 「トートコ トートコ コーウメ」	4 6

ネズミサシ *Juniperus rigida* Sieb. et Zucc.

方 言	方言採集地	被採集者年齢	採集年月日
イガムロ	大竹市平瀬	9 3	
	大竹市栗谷後原	9 0	
	(大竹市防鹿出身)	6 9	平成3年12月29日
	岩国市通津町畑	5 1	平成3年12月29日
	岩国市通津町本呂尾	6 2	平成3年12月29日
ヒムロ	山口県玖珂郡美和町向原	8 2	平成3年12月30日
	安佐北区可部町九品寺	5 6	
	安佐北区可部南	5 1	
	安佐南区沼田町三城田	7 5	
	安佐南区沼田町阿戸	4 2	
	安佐北区白木町大迫	6 5	平成4年1月12日
	安佐北区白木町栲谷	6 9	平成4年1月12日
ムロ	山口県玖珂郡美和町向原	7 5	平成3年12月30日
ムロウギ	豊田郡安浦町沖の浜	8 4	平成3年12月31日
ムロギ	三次市上志和地	6 9	
モロウギ	賀茂郡河内町入野	5 7	
	賀茂郡大和町椋梨	8 3	
	世羅郡世羅町東大田	6 5	
	甲奴郡上下町松崎	7 0	
モロギ	三次市太田幸町五反田	7 3	
	世羅郡甲山町赤屋	6 8	
	東広島市高屋町小竹	6 4	
	三次市廻神町泉水	7 3	
	双三郡三和町上滝	7 0	
	三原市沼田町	8 1	
	豊田郡安芸津町市之畑	7 8	
	(神石郡三和町父木野出身)	5 6	平成3年
	豊田郡本郷町上谷	7 0	平成3年12月31日
竹原市宗越町	8 0	平成3年12月31日	

利用その他

- ・ 「腐りにくい木で」 畑のそばの持ち山の残し木をみての話
———大竹市平瀬で聞き取り 当時 9 3 歳
- ・ 「境界は誰が行っても分からんようになってきたが、昔しゃあフクラシ、ネズモチ、ムギメシノキ、モロギをだいたい使いよったです」
———世羅郡甲山町赤屋で聞き取り 当時 6 8 歳
- ・ 「わりあい太とうに育ちにくいもので……しかも枯れにくい木例えばモロウギやネズモチじゃろ、モロウギは枯れてもいつまでも腐らずに立っておるし」(境界の木についての話で)
———賀茂郡大和町椋梨で聞き取り 当時 8 3 歳
- ・ 「境界木はモロウギやマツじゃつたら、ねじれたような木をの、クリの木をクイにして打ったり、石を置いたりしよったこともある。」
———世羅郡世羅町東大田で聞き取り 当時 6 5 歳
- ・ 「そうじゃの、地ふくはクリ、ツガ、ヒムロかの、木風呂の材にもなるカヤを使う人もあったが……」地ふくについての話で
———安佐北区可部町九品寺で聞き取り 当時 5 6 歳
- ・ 「ヒムロはええがの、腐ることはないが山にゃ地ふくになるような太い木がないの。育つのが遅いし、若木は伸びるがある大きさからは太らんの……」地ふくについての話で
———安佐北区可部南で聞き取り 当時 5 1 歳
- ・ ウシのハナグリについて「ワラをのうてハナグリにしょつたが二週間位しかもてんかった。たいていはヒムロの枝を曲げて作りよった。そりゃあ強うて……」
———安佐南区沼田町三城田で聞き取り 当時 7 5 歳
- ・ 稲藁架けについて「麦のハデも稲ハデも、稲グロの芯もたいていモロウギを使う。腐らんし硬い木でしよ。」
———甲奴郡上下町松崎で聞き取り 当時 7 0 歳
- ・ 稲藁架けについて「この辺はモロギいいますが、それをハゼ足に使います。粘いし強いし……」
———東広島市高屋町小竹で聞き取り 当時 6 4 歳
- ・ 稲藁架けについて「渡す分はマツカスギ、突っ張る分はモロウギじゃろ、腐らんけえ。モロウギでも柔らかいものは使わん。ヒメモロウギ言うて、表面の皮が食い込んで細いのがええ」
———賀茂郡河内町入野で聞き取り 当時 5 7 歳
- ・ 牛のはなぐり、地ふく、太い木は床柱
———岩国市通津町畑で平成 3 年 12 月 29 日に聞き取り 当時 5 1 歳
- ・ なかなか芯は腐りにくい
———岩国市通津町本呂尾で平成 3 年 12 月 29 日に聞き取り 当時 6 2 歳
- ・ 牛の鼻輪について「ヒムロの芯を生木のうちに火であぶって曲げよった。」
———安佐北区白木町栃谷で平成 4 年 1 月 12 日 当時 6 9 歳
- ・ 腐りにくい木であることはよく知られている。私自身広島市郷土資料館に勤めていたおり、たびたび市内の地場産業調査へ出かけていた。かつてアサの製品づくりで栄えた安佐南区古市にその面影を訪ねたおりに思いもかけない発見に喜んだのである。というのもアサの一次加工したコギソを干していた竿かけが今なお洗濯物の竿かけに使われていて、その材がネズミサシであったからである。屋根よりも高い竿かけが半世紀

モミ *Abies firma* Sieb. et Zucc.

和名の由来

- ・ 清水 清著 「植物の名前小事典」誠文堂新光社 昭和53年発行
「天治宇鏡に縦、毛牟乃木（モムノキ）とある。古名をモムノキといい、それから転化したとも、また臣（おみ）の木から転化したともいう。」
- ・ 牧野富太郎著「牧野 新日本植物図鑑」北隆館
「語源は充分には明らかでない。一名サナギ、古名モムノキ、またオミノキ」

利用その他

- ・ 「2升釜、3升釜などの蓋はモミでなければあいいけんの。わりと木が堅とうてやや重いのがええんじやろうの、モミのスニがのう」と言う。スニの意味が分からずに聞き返したら「1寸2分の板を使こうて作るわけよの」後日ふたたびモミについて聞くと「タンスも、今はないがナガモチの材も使おう、ガクブチがええいほどではないが…座板に使うし、一般家庭などのマナイタはモミが多いじゃあなからうかの」
———安佐北区安佐町久地で1982年12月28日に聞き取り 当時65歳
- ・ 「天井板はモミがええ、ふしのないのがの。そりゃあ木目がきれいだし、薪にゃあ不向き、パチパチはじける（火花が飛び散る）けえ」
———佐伯区倉重で1982年12月28日に聞き取り 当時69歳
- ・ 「枝がよう張る木で」と前置きしてあたりの山を見渡してから「材は白いけえ天井板にええが、押し込みの内張りやモチを入れるムロブタにもつかわれる。目がかたいこともあって、それに多少臭いこともありネズミが嫌ういうが…」
———神石郡三和町高蓋で1983年1月に聞き取り 当時49歳
- ・ 「天井板は4分の板を使うが、モミは白うて木目がきれいであええが、ふしが大きいので ねとき をつかう。」
———甲奴郡上下町松崎で1983年1月30日に聞き取り 当時67歳
- ・ 「モミはよう太るけえ目が荒い、小もうに割るとひわる。」
———世羅郡甲山町小寺で1983年2月6日に聞き取り 当時86歳
- ・ 天井板について「マツか、スギか、モミじゃろ」と即座に出た。
———御調郡御調町前後で1983年2月6日に聞き取り 当時65歳
- ・ モミはなにかためになった木かと聞くと「天井板に使う」と大工ひとすじに生き続けただけに一番にあげた。
———賀茂郡大和町椋梨で1983年2月12日に聞き取り 当時75歳
- ・ 「モミはネズミがようかじらんいうての、米の入れる箱をセイロいうがのモミの板を昔から使うがの。」
———山県郡豊平町戸谷で1983年3月5日に聞き取り 当時90歳
- ・ 近くの旧家の屋敷のモミの大木をみて「あれみたいな高い木を植えておくと、雷が家に落ちん、木に落ちる言うて、家の棟より高いものが欲しい言うての。」
———佐伯郡佐伯町玖島で聞き取り 当時70歳



名 称	広島市植物公園紀要第17号
主 管 課 所 在 地	財団法人広島市公園協会植物公園 広島市佐伯区倉重三丁目495 〒731-51 TEL(082)922-3600
発行年月日	平成9年3月31日
印刷会社名	株式会社 ニシキプリント







広島市植物公園 紀要

第 17 号

1997

広島市植物公園